



TITLE:

ガザン・カンが詳述するモンゴル 帝國遊牧部族連合：モンゴル帝國各 ウルスの中核部族

AUTHOR(S):

志茂, 碩敏

CITATION:

志茂, 碩敏. ガザン・カンが詳述するモンゴル帝國遊牧部族連合：モン
ゴル帝國各ウルスの中核部族. 東洋史研究 2001, 60(2): 405-456

ISSUE DATE:

2001-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155381>

RIGHT:

ガザン・カンが詳述する モンゴル帝國遊牧部族連合 ——モンゴル帝國各ウルスの中核部族——

志 茂 碩 敏

序 章

1. 従來の研究の決定的な誤り
2. ガザン・カンの『モンゴル史』
3. 術語 buzurg

第1章 ガザン・カンが伝えるモンゴル帝國の「御家人」達

1. 現代に至るまでの研究史
2. 各ウルスにおける高位・高官の「御家人」達の輩出數
3. チンギス一門の廣義の家族員

第2章 モンゴル帝國各ウルスの閣僚と軍隊

1. トルイ家
 - (1) トルイ家宗家（モンケ，アリク・ブケ家）
 - (2) フレグ家
 - (3) クビライ家
2. チャガタイ家
3. オゴデイ家
4. ジョチ家
5. 東方王家

結 び

序 章

1. 従來の研究の決定的な誤り

モンゴル帝國は、匈奴以來の一連の遊牧國家の頂點に立つ遊牧部族連合國家である。王族チンギス・カン一門と、チンギス一門を輔弼し、閣僚・重鎮として當該ウルスの運営にあたった「御家人」(nökör) と呼ばれる遊牧諸部族の部將達が支配者層を形成した。遊牧部族連合國家モンゴル帝國を理解するために

は、まず、モンゴル諸部族の「御家人」達とチンギス一門との強固な絆の詳細が具体的に明らかにされねばならない。ところが、驚くべきことに、19世紀に本格的なモンゴル帝國史研究が始まって以来、モンゴル帝國の中核を構成するモンゴル系、テュルク系遊牧諸部族の「御家人」達が統轄的に考察されたことは全くなかった。チンギス一門と麾下のモンゴル諸部族の「御家人」達との絆をモンゴル支配者層自らが詳細に語って編纂させた唯一無二の貴重史料が存在したが、諸先學はその史料の眞の内容も史料的价值も正しく理解できず、史料中の「チンギス一門」、「御家人」を意味する術語を術語として理解することもできなかった。そもそも、モンゴル帝國史研究の前提が全く誤っており、核心部分の研究にまで至りようがなかったのである。

かつての遊牧帝國の壓倒的な優位を完全に逆轉させていた19世紀の西歐において、諸先學は當時の状況をそのまま過去にまであてはめ、遊牧帝國や遊牧君主を「未開の地に成立した野蠻國」、「蠻族の酋長」として捉えた。モンゴル帝國に關しても、「野蠻で未開のモンゴル部將と、彼等を指導・補佐して國政に參畫した開化した非モンゴル定住民」という前提を自明のものとして研究を進め、13・4世紀モンゴル帝國の世界支配を蠻族の蠻行とみなした。とんでもない誤りである。モンゴル帝國の世界支配は軍事、經濟、科學技術、學術、文化等々の卓越して開化した總合力をもってなされたものである。「野蠻で未開」とされたモンゴル王族や有力「御家人」達支配者層は、實際は東は漢土から西はヨーロッパに至る歴史、地理を知悉し、當時の世界情勢に精通する開化した存在であり、確實な知識と情報をもって商業民に資本を貸し與えて利益をあげる「銀行家」、「資本家」、「經營者」であった。片や、資本を貸し與えられる特權商人や、モンゴル支配者層のもとに出仕する治下のタジク人、漢人等の非モンゴル定住民達は、言わば、現地採用の「^{ひら}平行員」、「^{ひら}平社員」、「經營コンサルタント」に相當した。即ち、両者は「主人」、「經營者」と「下僕」、「召使」、「使用人」の關係にあった。モンゴル政權に仕える非モンゴル達は、斷じてモンゴル支配者層に屬する人間ではなかったのである。しかしながら、主従關係を全く逆轉させた「開化した非モンゴル定住民に指導・補佐される野蠻で未開のモンゴル遊牧民」という前提は一旦まかり通ると、19世紀以來百數

十年變ることはなかった。こうした前提で研究に臨んだ諸先學がいくら唯一無二の貴重史料を眺めたところで、モンゴル帝國諸ウルスの運営にあたった「御家人」達を支配者層とは理解できなかったし、「御家人」という術語を術語として理解することもできなかったのである。當然のことながら、「御家人」達を統轄的な考察の対象とすることもなかった。かくして、屋臺骨となるモンゴル支配者層が見事に脱落したモンゴル帝國像が提示され續けることとなった。

モンゴルを「野蠻・未開」と蔑視し、モンゴル帝國の支配者層・屋臺骨となるモンゴル部將達を頭から問題視しなかった19世紀の諸先學が「御家人」という術語に気づかなかったことについてはさておくとしても、その後の諸々の研究者達が百数十年にわたり、「御家人」を意味する術語をそれと気づかずに考察の対象外に放置し續けたまま研究がなされ續けてきたことはあまりにも杜撰な話である。「核心部分」を見誤って脱落させてしまえば、いくら「取りまき部分」を研究したところで本質の解明には至らない。早急に「御家人」達とチンギス一門との結びつきを逐一検討し、長らく續いてきた支配者層不在のモンゴル帝國像を糺していかなければならない。本題に入る前に、従来、正しく把握されていなかった前記貴重史料の成立の経緯とその内容、及び、術語「御家人」を理解する鍵となる重要術語 *buzurg* のそれぞれについて整理しておきたい。

2. ガザン・カンの『モンゴル史』

「モンゴルは沈黙して自らについての記録を残さなかった」と言われているが、これは全くの誤りである。確かにモンゴル支配者層は自らの言語であるモンゴル語によるまとまった形の同時代史料を残しはしなかった。しかし、實は、モンゴルの帝王自身が自らの國家と自らの歴史について詳しく口述し、非モンゴル語で編纂させた浩瀚な貴重な史料が存在したのである。この貴重史料とは、遊牧部族連合國家フレグ・ウルス第七代の帝王ガザン・カン（在位 1295—1304）自らが、チンギス一門と麾下のモンゴル諸部族の部將達＝「御家人」達との絆を生々しく、詳細に語り、編纂主幹のラシード・ウッディーンにペルシア語で編纂させたモンゴルの正史『モンゴル史』（*Tārīkh-i Mughūl*）のこと

であり、現在では『集史』『モンゴル史』⁽¹⁾の形で伝えられているものである。

編纂者のラシードは『モンゴル史』中に以下のように記している⁽²⁾。

諸々の歴史に関する知識という点で〔ガザン・カン是非常に秀れたものを持っていた〕。とくに、モンゴル人達の間で非常に重要なものと考えられているモンゴルの歴史上の様々な出来事〔に精通していた〕。祖先達・親族達の男女の名、各地にいた、また今いる新舊の御家人達の名、〔祖先達、親族達、御家人達の〕後裔達各自の系譜を数多く暗誦していた。全モンゴル諸部族中、Pulād Āqāを除いて誰もガザン・カンのように精通しておらず、總ての者がガザンから學んでいるほどであった。〔今般私が〕書き上げた『モンゴル史』(Tārīkh-i Mughūl)は、大部分ガザン・カンから〔モンゴルの歴史やモンゴル王族・御家人の名と系譜を〕教えてもらい完成することができたのである。ガザン・カン自身は知っていたがこの『モンゴル史』には書かれなかったモンゴルの秘事、物語が澤山ある。

この記事や、ガザン・カンの強い意志によって正史編纂の敕令が發せられたことを伝える『モンゴル史』序文の記事⁽³⁾から、『モンゴル史』の事実上の作者が編纂企畫者、口述者のガザン・カンであることは明白である。また、『モンゴル史』がガザン・カンの後繼者オルジェイト・カン(在位1304—1316)の命令で『集史』『モンゴル史』と改題された時、オルジェイトの手で十全な手直しが施されたことは書中に明記されている⁽⁴⁾。モンゴルの帝王を事実上の著者とする『モンゴル史』(『集史』『モンゴル史』)が遊牧部族連合國家モンゴル帝國の内實を詳細に知り得る唯一無二の貴重史料⁽⁵⁾であることは、本來は自明の事

(1) 本稿における『集史』『モンゴル史』の引用にあたっては、原典『モンゴル史』の姿を最もよく傳えているトプカプ宮殿附圖圖書館所藏寫本『Jāmi' al-Tawārīkh』(Rewan Kōshkū 1518)〔Rと略記〕を底本とし、その他の寫本を参照する。

(2) R: 296a.

(3) R: 7a~8a. 拙著『モンゴル帝國史研究序説』(東京大學出版會, 1995年)〔以下『序説』と略記〕pp. 3-6.

(4) R: 3b.

(5) ガザン・カンの『モンゴル史』(前述した如く、現在では『集史』『モンゴル史』の形で伝えられている。)以外にも、モンゴル治下の定住民であるタジク人、漢人等がペルシア語、漢文等で記したモンゴル帝國關係の史料が数多く存在するが、モンゴル政權の「使用人」である非モンゴル達にはモンゴル政權の内部を詳しく知る術はなかったし、ユーラシア大陸の東西に跨るモンゴル帝國の全域にわたって見聞する機會

柄のはずであった。ところが、「野蠻で未開のモンゴルと開化した非モンゴル定住民」を自明の前提とする諸先學にとって、『モンゴル史』の事実上の著者がモンゴルの帝王自身であると認識することなど思いもよらなかった。編纂主幹、ムスリムのラシードの著作と決め込んだ彼等は、『モンゴル史』のペルシア語の字面を西アジア、イスラムの常識で読みとり、遊牧部族連合國家モンゴル帝國の根幹に関わる「御家人」という重要術語を術語と認識できずに全面的に考察の対象外に看過し、放置してしまった。ラシードは、自ら記しているように、「主人」であるモンゴル君主の口述・指示をあくまでも「下僕」としてイスラム史観に偏ることなく忠實に筆記・編纂した人物にすぎないのである。

『モンゴル史』はフレグ・ウルスの逼迫した政治状況の産物であった。フレグの征服活動に加わった極めて多系統の部族軍が戦時体制のまま征服地に居ついて成立したフレグ・ウルスには当初から分立的要素が内包されていた。1282年、第二代イル・カンのアバカ・カンの没時以後、カン位繼承争いと絡んだ内訌が頻發し、國庫は底をつき、商人に賣りとばされたり、乞食に身を落すモンゴル兵士も出てきた。イラン生れのモンゴル將兵はモンゴルとしてのアイデンティティを喪失し、フレグ家への忠誠心も薄れがちであった。王族フレグ一門と麾下のモンゴル諸部族との、いわば「御恩」と「奉公」ともいえる絆が極端に弛み、遊牧部族連合國家フレグ・ウルスが崩壊の危機に直面した時、ガザン・カンは、内部の結束を回復させて國を立て直すための重要國家事業の二本柱として、マムルーク朝への遠征軍派遣と、これと表裏一體連動させたこの正史『モンゴル史』編纂事業を敢行した。モンゴルの歴史に精通していたガザンは、チンギス一門と麾下のモンゴル諸部將との強い絆と、その絆によって達成されてきたモンゴル帝國榮光の歴史を、チンギス・カンの遙か遠い祖先の時代から14世紀初頭に至るまで帝國の全域にわたって詳細に口述し、ラシードに編纂させた。特に、各ウルスのカアン、カン、諸王達に仕え、閣僚・重鎮として當該ウルスを支えた有力「御家人」達については逐一名を挙げ、一門の來歴、

も殆どなかった。非モンゴル達が記したこれら諸史料の史料的价值は、モンゴルの帝王自らがチンギス一門と諸部族との絆を口述して成書した『モンゴル史』（『集史』『モンゴル史』）には遠く及ばない。『モンゴル史』は文字どおりモンゴル帝國史研究上の唯一無二の史料なのである。

系譜と共に各自のチンギス一門に對する功業、諸ウルスにおける地位・職掌とその繼承、チンギス一門との姻戚關係等を詳細に述べた。編纂にあたってガザンはフレグ・ウルスの有力「御家人」や古老達への取材を行わせ、ラシードには宮廷内の古文書類をも参照させた。ガザンは自ら企畫し、自ら參畫した『モンゴル史』編纂事業を通じ、現在直面しているフレグ・ウルスの危機的状況を打開して生き残っていくためには、チンギス直系の子孫でフレグ家嫡流の自らのもとに結集する以外に道がないことをフレグ・ウルスの成員達に訴え、部族連合の強固な結束を回復させようと圖つたのである。編纂作業の過程での有力「御家人」や古老達への取材を通じてフレグ・ウルスの成員達に自分達の先祖とチンギス家との強い絆をあらためて強く認識させること、これこそが『モンゴル史』編纂事業の眼目であった。ガザン・カン自らが口述して遂行させた『モンゴル史』編纂事業は編纂作業の過程にこそ重要な意味があった。『モンゴル史』はガザン・カン時代の危機が一應克服され、新たな國家體制確立期に入ったオルジェイト・カンの時代に完成し、オルジェイトに獻呈された。時、あたかも大元ウルスのもとに東西諸ウルスが一體化した時期でもあった。モンゴル帝國盛時の記念物としてオルジェイト・カンの命でモンゴル帝國を中心とする『世界史』『集史』が編纂された時、『モンゴル史』はオルジェイト自身の手直しを経て一部改變され、『集史』の一部をなす『集史』『モンゴル史』⁽⁶⁾の形で現在に伝えられることとなった。遊牧部族連合國家フレグ・ウルス崩壊の危機に直面したガザン・カンの自らのウルス立て直しにかけた執念が遊牧部族連合國家モンゴル帝國に關する唯一無二の史料を後世に残すことになり、今日のモンゴル帝國遊牧部族連合の内實解明を可能としたのである。

3. 術語 buzurg

ガザン・カンの口述をうけたラシードは『モンゴル史』を編纂するにあた

(6) 『モンゴル史』原典の姿を最もよく伝える前記 R 寫本における核心部分の荒削りや直截な表現はガザン・カンの切迫した状況を伝える迫力がある。『モンゴル史』が『集史』『モンゴル史』として改變された時、こうした文章表現や言いまわしが細部に至るまで新たに整えられる一方、大きな削除も施された。『集史』『モンゴル史』は初版本といえども『モンゴル史』の改編版なのである。

り、「チンギス・カン〔一門〕」,「王族」を意味する術語をペルシア語 *buzurg* で記した。*buzurg* は「大きい」を意味する形容詞であり,「貴顯」,「高官」を意味する名詞でもある。名詞 *buzurg* を「チンギス・カン〔一門〕」,「王族」を意味する術語として使ったわけである。そして,「先祖傳來の地位・職掌を繼承して代々チンギス一門に仕えるモンゴル部將」を *amīr-i buzurg* と記した。直譯すれば「チンギス一門に仕える〔モンゴル〕部將」となる。「チンギス一門の家人」,即ち,「御家人」を意味するモンゴル語術語 *nökör* のペルシア語譯である。ところが, *buzurg* を形容詞「大きい」の意にそのまま解した諸先學は, *amīr-i buzurg* を「武將」,「部將」を意味する普通名詞 *amīr* にありきたりの形容詞が附いた「大アミール」(*great amīr, great commander*)と機械的に譯すのみで,その實體については全く考察の對象とすることはなかったのである。*amīr-i buzurg* と同様,術語 *buzurg* が人物を意味する名詞と結びついた例として「*ilchī-yi buzurg*」,「*ustād-i buzurg*」がある。*ilchī* (使者)に *buzurg* が附いた前者については漢文史料中にも「大使臣」の形で見うけられるが,これは「身體の大きな使者」を意味するものではなく,「カアン,カンの使者」=「敕使」を意味する術語である。*ustād* (學者)に *buzurg* が附いた後者も「大學者」を意味するものではなく,「チンギス一門の皇子の師父」を意味する術語であり,漢語「太師」起源のモンゴル語のペルシア語譯である⁽⁷⁾。

『モンゴル史』中,「チンギス・カン〔一門〕」,「王族」を意味する *buzurg* の用例は *amīr-i buzurg*, *ilchī-yi buzurg*, *ustād-i buzurg* 以外の術語にも多数見うけられる。ペルシア語史料のみならず,漢文史料中にもペルシア語史料と對應する多くの例が表Ⅰの如く知られている⁽⁸⁾。

これらのうち,「御陵」は『モンゴル史』中,通常は *ghurūq* (立入禁止の場所・墳墓)に *buzurg* を附けた *ghurūq-i buzurg* の形で記されているが,「*yaka* (大) *qurūq*」とモンゴル語を音寫した形でも記されている⁽⁹⁾。この例から,まさに *buzurg* がモンゴル語で「大」を意味する *yeke* の直譯であるこ

(7) R: 31b, 129b.

(8) 漢文史料における用例は杉山正明氏の御教示によるものである。

(9) R: 194a.

表 I

敕使	ilchī-yi buzurg	大使臣
カアン, カンの帳幕・御殿	urdū-yi buzurg	大帳殿
チンギス・カン法典	yāsā-yi buzurg	大法令
玉璽	tamghā-yi buzurg	大玉璽
御陵	ghurūq-i buzurg	大禁地
玉座	takht-i buzurg	大寶位
カアン, カン發行の牌符	pāiza-yi buzurg	大牌符
チンギス・カン一門のユルト	yūrt-i buzurg	大營盤
王族驛傳	yām-i buzurg	大驛傳
チンギス・カンの慣行	yūsūn-i buzurg	大體例
カアン, カンの敕令	hukm-i yarlıgh-i buzurg	大聖旨
チンギス・カンの建てた國モンゴル帝國	ülüs-i buzurg	大蒙古國
カアン, カンの中軍	qūl-i buzurg	大中軍
王族集會	qūriltāi-yi buzurg	大集會
王族宴會	ṭūi-yi buzurg	大宴
カアン, カンの宮廷	bārghāh-i buzurg	大廷
カアン, カンの直屬軍・親衛軍	lashkar-i buzurg	大軍
親衛千人隊	hezāre-yi buzurg	御帳前首千戶
親衛百人隊	ṣade-yi buzurg	
王族の食事	āsh-i buzurg	
師父 (皇子の養育係)	ustād-i buzurg	太師

とが確認される。つまり、モンゴル語でも「チンギス・カン〔一門〕」を「大〔きい〕」を意味する語で表わしており、これをペルシア語譯する時、「大きい」を意味すると共に「貴顯」をも意味する buzurg の語が充てられたのである。

さて、「御家人」を意味するモンゴル語術語 nökör は『モンゴル史』中、nökör 起源の「nūkar」という語でもペルシア語譯されている。nūkar は通常は「僚友」, 「伴」, 「召使」, 「從者」, 「家人」を意味する普通名詞だが、『モンゴル史』においては「チンギス・カン〔一門〕の家人」=「御家人」を意味する amīr-i buzurg と同義の術語としても使われているのである。

また、amīr-i buzurg は『モンゴル史』中、buzurg を省略して單に amīr, あるいは複數形の umarā' の形で出てくことも多い (もちろん、これはとくにモンゴル部將に言及する場合のことである。それ以外においては amīr, umarā' の語を本

來のペルシア語・アラビア語の「原義」で使用していることも當然あるわけである。ただし、文脈上きちんと読めば、その違いは自ら判然とする)。この場合は勿論のこと、「御家人」を意味する術語である。amīr, nūkar という何の變哲もない普通名詞が『モンゴル史』中では、「先祖傳來の地位・職掌を繼承して代々チンギス一門に仕えるモンゴル部將」＝「御家人」を指す術語としても使われているのである。

『モンゴル史』「アルグン紀」中、諸王ジュシュケブを擁してアルグン・カンに叛逆を企てた有力「御家人」 Būqā とその同調者達について述べた同一内容の二つの記事に、以下のようにある¹⁰。

Jūshkāb muchalkāhā-yi ū va umarā' birūn āward
誓詞 Būqā

Jūshkāb khathā-yi ū va nūkarān birūn āward
誓詞の紙片 Būqā

この例は nūkar = amīr (-i buzurg) を端的に示している。

諸先學は、以上述べてきたような amīr, amīr-i buzurg, nūkar を特別の意味をもつ術語とは全く認識できなかった。buzurg と組み合わせて記されている数多くの術語も術語とは認識できなかった。『モンゴル史』は、buzurg の語でもしばしば記されることのある「チンギス一門」と amīr-i buzurg の名で記される麾下のモンゴル部將＝「御家人」達との強い絆を詳細に伝える史料である。buzurg の内容を正確に理解できていなければ『モンゴル史』の内容を正しく理解することなどとうていできない。諸先學の如く、buzurg の意味が判らず、「チンギス一門」、「王族」、「御家人」その他、諸々の重要術語を術語と認識できずに全面的に考察の対象外に放置したまま唯一無二の史料である『モンゴル史』をいくら眺めてみても、その核心部分の内容は判りようがなかったのである。

第1章 ガザン・カンが伝えるモンゴル帝國の「御家人」達

ガザン・カンの口述をうけたラシードは、モンゴル帝國各ウルスの「御家人」達とチンギス一門との絆の核心部分を『モンゴル史』巻頭の「テュルク・

[10] R: 264b.

モンゴル諸部族史」(「部族史」)に部族別に統轄的にまとめ、各「本紀」第一章の王族世系表、皇妃表中に、チンギス一門と姻戚関係を結んだ各部族の「御家人」達について詳細に記し、また、各「本紀」第二章中に、チンギス一門に仕えた「御家人」達の具体的な行動を傳えた。さらに、オルジェイト・カンの手直しを受け、『モンゴル史』を『集史』『モンゴル史』に改変した時、「部族史」その他をもとに、新情報も加えて『系譜集』『モンゴル系譜』⁽¹⁾を附篇として編纂した。「部族別御家人一覧」ともいえる『モンゴル史』『部族史』と、「カアン・カンの時代別御家人一覧」である「モンゴル系譜」はモンゴル君主自身の口述に基づき、誰がどの部族の「御家人」であるかを明確に述べ、一般の「御家人」と「極位御家人」(amīr-i beghāyat mu'tabar, amīr-i bas mu'tabar)、「高位御家人」(amīr-i buzurg-i mu'tabar, amīr-i mu'tabar)を正確に區別して記した際立って貴重な基本史料である。これら二史料を核に据え、『モンゴル史』『本紀』第一章、第二章の記事を参照しない限り、モンゴル帝國諸ウルの「御家人」達を網羅的に考察して分析することは不可能である。しかしながら、「部族史」,'モンゴル系譜」の記事と『モンゴル史』の諸「本紀」その他の記事をつき合せて分析していけば、モンゴル帝國各ウルの「御家人」達の動向が当該ウルの全時代にわたって等しい精度で明確に整理され、直ちにモンゴル帝國遊牧部族連合の全體像が明らかにされるというわけではない。『モンゴル史』中、特に記述が詳しいフレグ・ウルスの場合は、チンギス・カンの遠い祖先の時代から14世紀初頭のガザン・カン時代に至るまでの「御家人」達の動向を、モンゴル史、フレグ・ウルス史の一續きの流れの中で理解することが可能だが、大元ウルス、チャガタイ・ウルス、ジョチ・ウルスの「御家人」達の動向については、フレグ・ウルスの例に比して「本紀」の記事が簡略であり、フレグ・ウルスと同様のことは望めない。また、『モンゴル史』には記されていない14世紀初頭以降の「御家人」達の動向を当該ウルス建國時以來の一貫した流れの中で把握できるのも豊富なペルシア語史料に恵まれたフレグ・ウルスの場合のみである。結局、「部族史」,'モンゴル系譜」の

(1) 『集史』附篇『系譜集(Shu'ab)』『モンゴル系譜』トブカブ宮殿附屬圖書館寫本(Aḥmet 2937)

記事を核に据えて当該ウスの全時代にわたるモンゴル部將達の動向を明らかにし、王族チンギス・カン一門と麾下の諸部族との部族連合の實體を實證的に考察し得るのはモンゴル帝國の諸ウス中、フレグ・ウスだけである。ガザン・カンが詳述したモンゴル帝國遊牧部族連合の實證的な究明は、フレグ・ウスの全時代にわたる考察結果を基礎に据え、これを突破口とし、より情報量の少い爾餘の諸ウスに関する史料と比較・對照していく以外に手はない。フレグ・ウスの全時代にわたる「御家人」達の動向が整理されないことには論は一步も進まないのである。ところが、『モンゴル史』の「フレグ紀」から「ガザン紀」に至る各「本紀」の記事中、「ガザン紀」の記事のみが唐突に詳しいため、建國時以來の「御家人」達の一貫した動向を直ちに理解することは難かしい。そして、ガザン・カン時代に至るまでの「御家人」達の動向を十分に把握してかからないと、ガザン・カン時代に續くオルジェイト・カン、アブー・サイード・カン時代の「御家人」達の動向を理解することができない。こういうわけで、建國時以來のフレグ・ウスの「御家人」達の動向を一續きの政治史の流れの中で明確にすることは一筋縄ではいかぬ難事業なのである。

まず、扱いにくいフレグ・ウスの「御家人」達について、現在に至るまで、どのような手順で、どこまで整理されてきたかを簡単に觸れ、しかる後、モンゴル帝國各ウスの「御家人」達について考察していこう。

1. 現在に至るまでの研究史

モンケ・カアン時代のフレグの西アジア遠征は、當時のモンゴル帝國の各王家の部族軍から一定の割当てで兵員達が徴發され、当該部族軍の長の子弟・親族の「御家人」達が遠征に加わる各部族軍の指揮にあたった。フレグは、これら部族軍と、オゴデイ・カアン時代に起源を持つモンゴル帝國の西方鎮守軍「ヒンドスタン・カシミール鎮守府」、「アゼルバイジャン鎮守府」の萬人隊を指揮下に入れて征服活動を行ったが、兄クビライと弟アリク・ブケのカアン位繼承争いや、征服地を窺う周邊諸國の動向を配慮して、麾下の征服軍共々タイランを中心とする征服地に留り、フレグ・ウスが成立した。極めて多系統の部族軍が戦時體制のまま征服地に居ついて成立したフレグ・ウスの分立的體質は

やがてカン位繼承争いと絡んだ「御家人」達の内訌を頻發させ、建國後40年近くを經過したガザン・カンの即位時、フレグ・ウルスは存亡の危機にさらされた。『モンゴル史』中、危機に直面して對處したガザン・カン時代の出來事を伝える「ガザン紀」の記事のみが先行の諸「本紀」に比して唐突に詳しい。このため、ガザン・カン時代の「御家人」達とそれ以前の時代の「御家人」達との繋りが直ちには理解しにくい。任地のホラサンからアゼルバイジャンに進軍したガザンがアバカ・カン（在位 1265—1282）没時以來の政争の中心にあった「御家人」達を徹底的に討滅して政權を確立したことは理解できるが、ガザンと行動を共にしたのが何者であるのか、ガザンに討たれたのが何者であるのか、「フレグ紀」から「ガザン紀」に至る諸「本紀」の記事からは皆目判らず、ガザン・カン時代のモンゴル諸勢力の大きな消長の核心部分も全容も全く判然としない。フレグの征服活動に加わって西アジアの地に居ついたモンゴル諸部族の「御家人」達とその後裔達、親族達のガザン・カン時代に至る動向を理解するためには、「部族史」、「モンゴル系譜」を驅使し、「本紀」中の記事その他を参照して、各部族の各系統ごとに「御家人」達の親子・兄弟・親族の系譜を逐一明らかにし、その具体的な行動を整理することが必須の課題となる。筆者はこの課題について現在に至るまで以下の如く考證を續けてきた。

- ① 「İl Khān 國史料に見られる Qarāūnās について」¹²⁾ (1971)
- ② 「İl Khān 國成立後の Adherbāijān 軍政府起源の軍隊について」¹³⁾ (1980)
- ③ 「Ghāzān Khān 政權の中核群について」¹⁴⁾ (1979)
- ④ 「Ghāzān Khān 歿後の İl Khān 國におけるモンゴル諸勢力の消長について」¹⁵⁾ (1981)

12) 『東洋學報』54—1, pp. 1-71, 1971年。この改稿版が、「İl Khān 國史料に見られる Qarāūnās について」（『アジア文化史論叢』3, 山川出版社, pp. 1-62, 1979年）であり、その英譯版、「The Qarāūnās in the Historical Materials of the İl Khanate (『Memoires of the Research Department of the Toyo Bunko』35, pp. 131-181, 1977) もある。なお、『序説』中にも、さらにやや形を變えて採録されている。

13) 『アジア・アフリカ言語文化研究』19, pp. 15-48, 1980年。『序説』中にも、やや表記を變えて採録されている。

14) 『アジア・アフリカ言語文化研究』18, pp. 56-150, 1979年。

15) 『アジア・アフリカ言語文化研究』21, pp. 74-110, 1981年。

- ⑤「イル汗國におけるモンゴル人」⁽¹⁶⁾ (1984)
- ⑥「イル汗國史上におけるフラグ家姻戚の有力諸部族」⁽¹⁷⁾ (1983)
- ⑦「イル汗國に於けるジャライル部族」⁽¹⁸⁾ (1988)
- ⑧「イル汗國史研究——イル汗諸政權の中樞について——」⁽¹⁹⁾ (1992)
- ⑨『モンゴル帝國史研究序説——イル汗國の中核部族——』⁽²⁰⁾ (1995)

フレグ・ウルス時代のペルシア語史料やマルコ・ポーロの記事中, qarāūnās, caraunas の名で出てくる者達の實體が何であるかは19世紀以來百数十年, 全く解明されていなかったが, ①において, qarāūnās とはオゴデイ・カアン時代に起源を持つモンゴル帝國の西方鎮守軍「ヒンドスタン・カシミール鎮守府」の萬人隊の成員の後裔達のフレグ・ウルス成立後の呼び名であること, フレグ・ウルス成立後, qarāūnās 達を主たる構成員としてイル・カンの直屬軍「親衛カラウナス萬人隊」, 「親衛カラウナス千人隊」, ホラサン守備の軍團「ホラサン・カラウナス萬人隊」が編成されて存続したことを論證した。そして, アバカ・カン没後の一連の政争においてこれらの軍隊を支配した「御家人」達が政争の中心にあり, ガザン・カンによって彼等は徹底的に討たれ, その軍隊が解體, 改變されたことを明らかにした。また, オゴデイ・カアン時代以來の西方鎮守軍「アゼルバイジャン鎮守府」の萬人隊に起源を持つ諸軍隊がフレグ・ウルス成立後も存続し, これらの軍隊を支配した「御家人」達がやはりアバカ・カン没後の一連の政争の中心にあり, 彼等もガザン・カンによって徹底的に討たれ, その軍隊を解體されたことを②で述べた。「ヒンドスタン・カシミール鎮守府」, 「アゼルバイジャン鎮守府」の萬人隊起源の軍隊はフレグ遠征軍起源の軍隊とは別系統の強力な舊勢力としてフレグ・ウルス成立後も存続し, 強固な政權確立を目ざすガザン・カンに徹底的に滅ぼされたのである。二つの西方鎮守府の萬人隊起源の軍隊の解體はガザン・カン時代のモンゴル諸勢力の消長の核心部分をなすものであり, これを明らかにしないことには

(16) 『東洋史研究』42—4, pp.130-166, 1984年。

(17) 『内陸アジア・西アジアの社會と文化』, pp.667-695, 山川出版社, 1983年。

(18) 『榎博士頌壽記念東洋史論叢』pp.233-276, 汲古書院, 1988年。

(19) 1992年3月, 東京大學提出博士論文(未刊行)

(20) 前註(3)参照。

ガザン・カン時代の基本的變容を理解することはできない。そして、西方鎮守府起源の軍隊のフレグ・ウルス成立後の動靜は「部族史」を参照しなければ解明することはできない。

オゴデイ・カアン時代の二つの西方鎮守府の萬人隊起源の軍隊の支配者達と彼等の同調者達を徹底的に滅ぼして確立されたガザン・カン政權を支えた「御家人」達について論じたのが③である。ガザン・カン政權の中核を構成したのが、ガザンが幼少時代を過したホラサン地方でガザンと個人的に結びつき、ガザンのアゼルバイジャン進軍に同行した者達と、アゼルバイジャンを中心に展開した一連の政争において敗退した者達であることを考證し、彼等がチングス・カン時代のいかなる「御家人」の後裔・親族であるかを明らかにした。

ガザン・カン時代に續くオルジェイト・カン時代、アブー・サイード・カン時代の「御家人」達について『オルジェイト史』、『ワッサーフ史』、『集史續編』等の記事から整理し、ガザン・カン政權の「御家人」達との関係を述べたのが④であり、①から④までの研究成果をもとに、フレグ・カン時代からアブー・サイード・カン時代に至る「御家人」達の動向を整理して示したのが⑤である。また、歴代イル・カン政權下、フレグ家姻族や「譜代家人」(ötegü boqol)の地位と特權を與えられたジャライル部族の「御家人」達が重鎮として有力であり、姻族と「譜代家人」がイル・カン諸政權を支える車の兩輪であることを指摘したのが⑥・⑦である。

①から⑦までの論文の考察により、フレグ・ウルスの「御家人」達の動向や特質が従来より遙かに整理された。しかし、フレグの征服活動、アバカ・カンによる敵國の軍隊の侵入撃退、アバカ・カン没後のカン位繼承争いと絡んだ一連の政争、ガザン・カン時代の大變革とオルジェイト・カン政權の成立、アブー・サイード・カン時代の政争、アブー・サイード・カン没後のモンゴル諸勢力の抗争とジャライル朝の成立というフレグ・ウルス史の大きな政治的流れの中で、建國時以來のモンゴル諸部族の「御家人」達の動向を明確な形で理解できるまでには至らなかった。ペルシア語史料の読み方が適切ではなかったのである。史料中に出てくる amīr-i buzurg, amīr, nūkar が「御家人」を意味する術語で、モンゴル語術語 nökör のペルシア語譯であることに気づいていなか

った。「部族史」中に当該部族の「amīr-i buzurg の某」, 「amīr の某」と記され, 「本紀」中には記事が見うけられない者が多数いる。従来の研究においては, 具体的な行動が知られていない者達とはかく考證の対象とはなりにくかったが, 「部族史」はモンゴル帝國各部族の「御家人一覽」で, ガザン・カンの口述の核心部分であり, 「部族史」に出てくる總ての「御家人」達を考察の対象としなければならなかったのである。有力「御家人」といえども, 平穩な時代には「本紀」中に行動の記事が残ることはない。「本紀」中に見られる「御家人」達を考察の対象とするだけではモンゴル諸部族の動向の全體像を把握することはできないのである。

こうした反省に立ち, 新たに「モンゴル系譜」, 『高貴系譜』の記事をも参照して博士論文として提出したのが⑧である。フレグ・ウルスにおいては, フレグ一門の擬制家族(フレグ一門の舅, 婿, 師父, 養子, 乳兄弟等, フレグ一門の廣義の家族員の家系の「御家人」達)やチンギス・カンの遙か遠い祖先の時代以來の譜代の家人の家系の「御家人」達等チンギス一門との絆が特に強い特定部族の特定系統の「御家人」達が準王族たる重鎮・閣僚として歴代イル・カン諸政權の中核を構成し, 先祖傳來の地位・職掌を繼承して自らのウルスの運営にあたったことを明らかにした。また, 重鎮・閣僚として歴代イル・カン政權下に重きをなした「極位御家人」, 「高位御家人」と呼ばれる特定部族の特定系統の「御家人」達はフレグ遠征軍の重鎮としてフレグに隨行してきた「御家人」達の後裔達, 親族達であることも明らかになった。

⑧の記述を大幅に簡略にし, フレグ・ウルス以外の諸ウルスの「御家人」達に関する考察を加えて, チンギス一門と「御家人」達との絆をモンゴル帝國全體の中で考察したのが⑨である。フレグ・ウルス以外の諸ウルスにおいても「極位御家人」, 「高位御家人」が要職に就いてカアン, カンを輔弼し, 当該ウルスの運営にあたっていたことが確認された。また, チンギス一門とモンゴル諸部族個々との絆の強弱はフレグ・ウルスの場合も他の諸ウルスの場合もほとんど同様であることも確認された。「極位御家人」(amīr-i beghāyat mu'tabar, amīr-i bas mu'tabar: 非常に mu'tabar である御家人), 「高位御家人」(amīr-i mu'tabar: mu'tabar である御家人)において, 「地位が高い」, 「高位の」を意味

する *mu'tabar* という語は『モンゴル史』中において、「よりチンギス・カン一門と近い関係にある」、「より古くからチンギス一門との絆が続いている」の意で使われており、「極位御家人」、「高位御家人」とは、「チンギス一門とより密接な結びつきがある位の高い御家人」、「より古くからチンギス一門に仕えている由緒正しい、位の高い御家人」の意となる。フレグ・ウルスの「御家人」達の分析結果は、まさに、よりチンギス一門との関係が強く、よりチンギス一門に古くから仕えていた者達がフレグ・ウルスの歴代の政権の中核部分にいたことを明確に示しており、「極位御家人」、「高位御家人」を擁する他の諸ウルスにおいても同様であることを一應確認することができた。また、これら一連の研究の過程で、*amīr-i buzurg*, *nūkar* 以外にもペルシア語で記されているモンゴル政権固有の術語がいくつか確認された。*mu'tamid al-mulk*, *mu'tamid 'alaihe* は「内務長官」の意であり、「オールド長」(*amīr-i ūrdū*) とほぼ同義の語である。また、*mu'tamid*, *mu'tabar*, *pīr* は「側近の重鎮」、「宿老」を意味する語であり、*muḥibb* は、チンギス政権の草創期、形成期、モンゴル帝国の成立後などのそれぞれの時期によって、「氣心の知れた信頼できる顧問」、「側用人」、「樞密顧問官」と譯される内務の重職を示す語である。

しかし、紙幅の制限もあり、フレグ・ウルスの「御家人」達を分析するにあたり、各部族の名前が知られている總ての「御家人」達について、それぞれの出自や地位・職掌を逐一考慮に入れ、網羅的に分析したわけではなかった。また、フレグ・ウルス以外のウルスについては、各部族の「御家人」の輩出数とチンギス一門との姻戚関係の頻度数の合計を出し、フレグ・ウルスの「御家人」達について得られた分析結果と大きく異なるものではないことを推定したにすぎない。要するに、チンギス一門と「御家人」達の結びつきの大筋は理解されたものの、出身部族が知られているモンゴル帝国各ウルスの「御家人」達總てを網羅しての分析は未だ成されていないのである。

本稿において、前記ペルシア語史料中に記されている各部族の總ての「御家人」達について、姻戚関係をはじめとするチンギス一門との関係、地位・職掌をできるだけ明らかにし、これらを部族ごとに、また、王家ごとに比較し、各部族の特質を明確にした上で、チンギス一門と「御家人」達の結びつきの内實

をより明らかにして示そう。

2. 各ウルスにおける高位・高官の「御家人」達の輩出数

『モンゴル史』『部族史』、各カアン、カンの諸「本紀」、「モンゴル系譜」その他のベルシア語史料中には、チンギス・カン政権の草創期、形成期からモンゴル帝國時代の14世紀初頭に至るまで、王族チンギス一門のもとに結集してモンゴル帝國遊牧部族連合を構成した約50部族の様々の系統の「御家人」達とその親族の部將達の名が700名ほど伝えられている。同一の「御家人」が異なるカアン、カンの政権にまたがって活動した場合をそれぞれ1名とみなした延べ人数は900名を越える。これら「御家人」達は、各ウルスの閣僚・重鎮として政権中樞の要職を占めた者、姻族としてチンギス一門の舅・婿になった者、チンギス・カンから千人隊を分與され、各ウルスに配された者達など様々であり、フレグ家のアバカ・カン、オルジェイト・カン、アリク・ブケ家の當主・諸王メリク・テムルの「御家人」については御家人筆頭、御家人次席以下の御家人序列が伝えられている⁽²⁾。それぞれの「御家人」の職掌に関しても、オールド長官をはじめとする内務の高官、御陵長官、王室領長官、親衛隊長官、親衛萬人隊長、親衛千人隊長、親衛百人隊長、コルチ、アクタチ、バウルチ、スクルチ、コシュチ、イダチ、シュスンチ等の個々の親衛隊の長と親衛隊士、ヤルグチ長官とヤルグチ、ビチクチ局の長官とビチクチ、驛站長官、地方總督、軍政長官、萬人隊長、千人隊長、百人隊長等についてその繼承とともに詳細に伝えられている。各部族の「御家人」達とチンギス一門との姻戚関係についても詳しく知ることができる。

當該部族出身者の名が具体的に知られている部族はモンゴル帝國各王家を合せて48部族に及ぶが、極位御家人・高位御家人は40部族から、萬人隊長、千人隊長、地方總督、軍政長官は32部族から輩出している。チンギス・カンが諸子弟に分與した千人隊は30部族に及び、個々の親衛隊の長・親衛隊士の輩出は29部族、チンギス一門と諸部族との姻戚関係は26部族に及ぶ。これらの事實は、モンゴル帝國が王族チンギス・カン一門と遊牧諸部族が連合した遊牧部族連合

(2) 『序説』pp. 135-137, 357-359, 478-480 参照。

國家であり、チンギス一門と各部族との姻戚關係が部族連合の絆の最も核心的な部分をなすことを端的に示している。但し、極位御家人・高位御家人の輩出數、特定の職掌に就いた「御家人」の輩出數、チンギス一門と諸部族との姻戚關係の件數は部族間に極めて大きな差があった。

こうしたモンゴル帝國各王家の「御家人」達を俯瞰して直ちに讀みとれるのは、より多くの極位御家人・高位御家人を輩出し、當該王家の御家人序列の上位を占め、重職に就いたのは、フレグ・ウルスの例と同様、チンギス一門により古くから仕えていた「譜代家人」の家系、早期來降者の家系の諸部族、チンギス一門と姻戚關係をはじめとする擬制的家族關係を有する「準王族」の諸部族であるという点である。各部族毎、系統毎にそれぞれの地位・職掌に就いた件數を累計していけば、部族間、系統間の強弱は自ら明らかにされるが、地位・職掌の重要度にポイント差をつけて集計すれば、その差はより明瞭に現われてくる。地位・職掌についてポイント差を設定し^㉒、各王家毎に御家人達の状況を部族別・系統別に示すと表Ⅱ（44頁～52頁参照）が得られる^㉓。

なお、職掌については、より、チンギス一門との繋りが強いものに高ポイントを與える。「オールド長官」、「内務長官」、「宿老」、「(樞密)顧問(官)」などは時代によって呼稱は異っても性格は似たものなので同点とする。

また、「御家人序列」については「御家人筆頭」30点、「御家人次席」20点、「第3位」18点、「第4位」17点……………「第19位」2点、「第20位」1点とする。

「御家人」達の地位・職掌、チンギス一門との關係を勘案してポイント差をつけたことにより、個々の部族の特徴が明瞭に現われ、総合ポイント1000点を越えるジャライト部族からポイント0点の部族まで極めて大きな差となって表われる。まず、表Ⅱからチンギス一門とモンゴル諸部族の連合體であるモンゴ

㉒ 総合ポイントがより明瞭に現われるよう、地位の上下と職掌の重要度に大きなポイント差を設定した。

㉓ これらの表の作成にあたっては、本來は各王家の「御家人」達各自について具體的な名・地位・職掌を逐一示すべきであり、その他、注記すべきことも多々あるが、總てを記すとあまりにも膨大な量になるので、これらについては次に刊行豫定の別著にゆずる。なお、表中、フレグ・ウルスの場合はガザン・カン没後の状況も含まれている。

ル帝國國家構造の大きな枠組を捉えてみたい。以下のことが指摘できる。

1. 総合ポイント第1位ジャライル部族は、御家人筆頭・次席の輩出数（16例）、オールド長官・宿老の輩出数（11例）、御陵長官・王室領長官の輩出数（4例）において、断然、他部族を圧倒している。総合ポイント第2位スルドス部族の御家人筆頭・次席の輩出数（8例）も目立つ。
2. チンギス一門との姻戚関係はオンギラト部族（50例）、オイラト部族（38例）が圧倒的に多い。これら兩部族はタタル部族（18例）、スルドス部族（17例）、ケレイト部族（17例）、バヤウト部族（15例）と共にチンギス一門の姻族を構成している。
3. 第1位ジャライル部族以下、スルドス、タタル、コンゴタン、バヤウト、オンギラト、オイラト、マングト、ケレイトに至る上位9部族は、チンギス一門の姻族、チンギスの義父（チンギスの生母の再婚相手）の家系、チンギスの養子の家系、チンギスの遠い祖先の時代以来の譜代の家人の家系出身者で、チンギス一門との絆が特に強く、第10位以下の諸部族と一線が畫される。チンギス家譜代の家人の家系の者達はチンギスの祖先達と寢食を共にした延長上にチンギス一門に仕えており、チンギス一門の廣義の家族員とも言えた。要するに、ジャライル部族以下の9部族は、チンギス一門の廣義の家族員を輩出する「準王族」部族であり、モンゴル帝國の各王家にわたって活躍した。
4. 第10位ウイグル部族についてはフレグ・ウルス以外の情報が少ないが、これは「ウイグル部族史」中にウイグル部族出身の御家人に関する記事が缺けていることに起因すると思われる。
5. 第11位アルラト部族以下、スーート、ウリヤンカン、フーシン、バーリン、コルラウト、ベスートの7部族は準王族部族に次いで極位御家人・高位御家人を輩出し、政權中樞の要職に就いた者もかなり多い。萬人隊長職が特に多い。モンゴル帝國の各王家にわたって活躍したが、チンギス一門との姻戚関係はフーシン部族の6例以外ほとんど無きに等しい。チンギス一門との擬制的家族関係は薄い。軍事、内政面に有力御家人を輩出する準王族部族に次ぐ強力部族といえる。

6. 第18位バルクート部族から第27位ノクズ部族までの諸部族は、チンギス一門との姻戚関係が4～6例知られている部族が多く、また、政權中樞の要職に就いた者もそこそこ輩出している。政權中樞の要職を複数の王家にわたって輩出したのは第25位キャート部族までであり、これら諸部族は中堅の部族といえる。

7. フレグ家のアバカ・カン、オルジェイト・カン、アリク・ブケ家の諸王メリク・テムルの御家人序列を見ると、第1位ジャライル部族から第9位ケイト部族に至る準王族部族に御家人筆頭・次席以下、序列一桁臺が集中している。『モンゴル史』、『オルジェイト史』の御家人序列中に記されている「御家人」達の出身部族の序列と、地位・職掌等を勘案して出された第1位ジャライル部族以下の強力部族の序列が見事に一致している。序列そのものにも加點したが、この分をさし引いても基本的に結果は全く同様である。

以上のように、チンギス一門とモンゴル諸部族との部族連合の絆には部族間で大きな強弱の差があり、チンギス一門との絆が最も強く、政權中樞の有力「御家人」を輩出したのはチンギス一門の廣義の家族員の家系の準王族部族であった。チンギス一門の廣義の家族員である「御家人」達の地位の高さについては、實は、「部族史」中にしばしば強調されて記されてはいた。しかし、従来、モンゴル帝國を構成する諸部族について表Ⅱに見られるような統轄的な整理がなされていなかった時点では、こうしたチンギス一門の廣義の家族員達に関する記事は、多くの部族の様々なエピソードの一つにまぎれて、その意味する内容の重要性について十分に理解されていないうらみがあった。各王家の「御家人」達について考察する前に、これらの記事について簡単に觸れておきたい。

3. チンギス一門の廣義の家族員

「オンギラト部族史」中に²⁴⁾

彼等〔オンギラト部族の婿達〕の地位は〔チンギス一門の〕息子達の上にあった。(中略)、現在〔ガゼン・カンの時代〕でも、〔大元ウルス

²⁴⁾ R: 32b.

の] カアンや、オゴデイ、チャガタイ、ジョチのウルスにおいて彼等の後裔達が多数婿となっている。

とあり、オンギラト部族の婿達の地位がチンギス一門の皇子達の上位にあり、14世紀はじめ、『モンゴル史』執筆當時もオンギラト部族がチンギス一門の姻族であることが伝えられている。有力姻族の婿達はチンギス一門と同等の扱いを受けていたのである²⁵⁾。

タタル部族の有力「御家人」の多くは、タタル部族がチンギスに討たれた時、戦場で拾われた少年や、殺戮から免れた妊婦から生れた子供達で、チンギスやその一門に養育されたチンギス家の養子の家系である。こうしたチンギス家の養子の一人 Shīgī Qūtūqū はオゴデイのオルドに入り、有職故實を學び高官となった人物だが、「タタル部族史」中に²⁶⁾、

[Shīgī Qūtūqū は] チンギス・カンの死後も生きていて、オゴデイ・カアンは彼を兄と呼んだ。彼はモンケ・カアンより上位で、[オゴデイ・カアンの] 諸子と並んで座っていた。

とあって、Shīgī Qūtūqū がチンギス一門の皇子達と同等の扱いを受けていたことが判る²⁷⁾。

さらに、「タタル部族史」中には²⁸⁾、

チンギス・カン時代も、また、その後[の時代]にも、[タタル] 集團から何人かが高位御家人となり、オルドの重鎮 (mu'tamid al-mulk-i ūrdūhā) となった。彼等には譜代家人に準ずる地位 (utakū bughūlī) が定められた。その後、[ガザン・カン時代の] 現時点に至るまで、有力な御家人が[チンギス一門の]それぞれのオルド、ウルスに現われた。再びチンギス一門から娘が與えられ、[チンギス一門も] 彼等から[娘を] 娶った。

とあって、チンギス一門の養子の家系であるタタル部族の御家人達が譜代家人に準ずる地位と特權とが與えられ、チンギス一門の姻族となったこと、チンギ

²⁵⁾ 「チンギス紀」千人隊一覽 Alchī Nūyān の千人隊の條 (R: 130a) にも「オンギラト部族史」と同内容の記事が伝えられている。

²⁶⁾ R: 18a.

²⁷⁾ 「チンギス紀」千人隊一覽, Shīgī Qūtūqū の千人隊の條 (R: 129a) にも「タタル部族史」と同内容の記事が伝えられている。

²⁸⁾ R: 18a.

スー門の各ウルス、オールドに有力「御家人」が輩出したことが伝えられている。

コンゴタン部族はチンギス家の譜代の家人の家系であった。チンギスの父イエスゲイが殺され、麾下の部衆が離散しようとする時、Charagha Abūkānはこれを留めようとして殺された。彼の子 Munklik Īchīge について「コンゴタン部族史」中には²⁹⁾、

〔Munklik Īchīge は〕艱難辛苦をチンギス・カンと共にした。チンギス・カンは己が母 Ūālūn Īka を彼に與え、全御家人達の最上位とした。〔Munklik は〕チンギス・カンの右脇に座っていた。(中略)〔息子 Teb Tengli が叛逆罪で〕殺されても〔Munklik の地位は〕以前同様、高位のままであった。

とある。また、Munklik はチンギスの最も氣心の知れた相談相手「顧問筆頭」(muhibb)であったとも伝えられている³⁰⁾。チンギス政権の御家人筆頭となった Munklik はトルイ家の千人隊長となり、チンギスの義兄弟となる Munklik の三人の息子もそれぞれトルイ家の千人隊長となった。これら三人の息子達の兄弟 Teb Tengli は本名は Kūkuchū で、シャーマンであり、チンギスの即位に重要な役割を果たしたが、後、専横の振舞があり、チンギス・カンに叛逆罪で殺された。彼が殺されても Munklik の御家人筆頭の地位は變ることはなかった。チンギスの祖先以來の譜代の家人の家系の出で、チンギスの生母の再婚相手である Munklik Īchīge はチンギス政権の草創期から「顧問筆頭」としてチンギスと艱難辛苦を共にし、チンギス政権確立後は御家人筆頭となり、息子達共々、千人隊を分與され、チンギス政権を支えたのである。「オゴデイ紀」中には、オゴデイー門の師父 (atābek) が自ら養育したチンギス一門の皇子達を「息子達」と呼んでいる例が見うけられ³¹⁾、義父同様、師父の地位も高かったことが窺われる。

上述したコンゴタン部族の Munklik Īchīge はチンギスの祖先以來の譜代の家人の家系の出身者であったが、チンギス家先祖代々の「家の子」、「郎黨」である譜代の家人の家系からモンゴル帝國諸ウルスに多くの「御家人」達が輩

²⁹⁾ R: 33b.

³⁰⁾ 「モンゴル系譜」の「チンギス・カンの御家人」の條: 106a

³¹⁾ R: 189b.

出し、高位に上り、高官となったことは「部族史」をはじめとする『モンゴル史』中の何ヶ所かでしばしば強調して記されている⁸²。「ジャライル部族史」中には⁸³、

〔ジャライル部族の者達はチンギス・カン七世の祖〕カイド・カンとその子孫、親族の捕虜・家人となり、父祖からの遺産としてチンギス・カンに伝えられた。このような譯で、ジャライル部族はチンギス・カンの譜代家人 (utakū bughūl) となったのであった。チンギス・カン、及び、彼の子孫の時代に〔ジャライル部族出身者は〕御家人となり、高位・榮譽の地位に就いた。

とある。ジャライル部族の強盛については、総合ポイントで圧倒的に他部族を凌いで第1位となったことから明らかである。フレグ・ウルスで強盛を保持したジャライル部族が譜代の家人の家系の出であることについては既に『序説』で述べた。

バヤウト部族も、チンギス・カン九世の祖の時代にまで遡る譜代の家人の家系であった。「バヤウト部族史」中には⁸⁴、

チンギス・カン時代、Sūrquān という名の者はチンギス・カンよりかなり年長であった。非常に賢い男であったので、様々の機会に時宜になつた發言をしていた。〔チンギス・カンは〕彼を立身出世させ、譜代家人 (utakū bughūl) の一員とさせた。

とある。Sūrquān はチンギスの「氣心の知れた信頼できる顧問」(mu'tabar) とも記されている人物⁸⁵で、さきの Munklik Īchige の場合同様、譜代の家人の家系の出身者がチンギス政権の草創期に有力な顧問としてチンギスに助言を與え、チンギス政権確立後、「譜代家人」の地位を與えられたことを知ることができる。また、「バヤウト部族史」中には、バヤウト部族がチンギス一門の姻族であることも伝えられている⁸⁶。

⁸² 『序説』 pp. 319-326.

⁸³ R: 14a.

⁸⁴ R: 37a.

⁸⁵ 「モンゴル系譜」の「チンギス・カンの御家人」の條: 106a

⁸⁶ R: 36b.

「スルドス部族史」中³⁷⁾、「この部族出身者のうちには御家人達が多数いたが、名聲を挙げ、地位を得、その活動がはっきりしている者を先に扱い、より重要な事件を先に述べよう。」とあり、真っ先に記されているのが Sūrghān Shira である。Sūrghān Shira は若年のチンギス・カンがタイチウト部族に捕えられ、首かせをつけたまま逃亡した時、追手から匿い通して彼の命を助けた人物として著名である³⁸⁾。「スルドス部族史」中に³⁹⁾、

Sūrghān Shira はチンギス・カンを匿ったことが露見したことを知る
とタイチウト部族の中から抜け出ることが必要であると認識し、家族と共に
営をたたんでチンギス・カンのもとにやってきた。チンギス・カンは彼
や彼の息子達、従者達を大いに厚遇し、最大限の名譽・尊敬を與えた。

とある。命を助け、チンギスのもとにやってきた Sūrghān Shira 一門に與えられた最大限の名譽と尊敬が子々孫々に至るまで續いたことは、スルドス部族がジャライル部族に次いで総合ポイントで第2位を占めていることから明瞭である。チンギス・カンのもとにより早く來降した者ほど重く用いられたが、チンギスの命を助けていち早く來降した Sūrghān Shira 一門は、いわば「來降者」筆頭の家系として、早期來降者達の中でも格別優遇されたのである。

この他、大きな抵抗もせずに来降したオイラト部族がチンギス一門の姻族となったことが「オイラト部族史」中に記されている⁴⁰⁾。

また、マングト部族の Jadai Nūyān はチンギスに叛こうとした兄達を諫めて殺された男の遺児であり、父が殺された時、まだ乳飲み子であった。母の親族に匿われて養育され、少年に成長してチンギスに託された。チンギスは Jadai に愛情を注ぎ、成長すると「御家人」に敍し、トルイ家の千人隊を支配させた⁴¹⁾。Jadai Nūyān 一門もチンギス家の養子の家系に準ずるのである。

さて、モンゴル帝國の諸ウルスの「御家人」達について、その地位・職掌等を勘案して総合ポイントを出した結果、モンゴル帝國はチンギス一門との絆が

(37) R: 35a, b.

(38) 『序説』pp. 338-340 参照。

(39) R: 36a.

(40) R: 21b.

(41) R: 40a, 128b.

最も強い準王族部族以下、準王族ではないが、軍事・内務に特に強力な部族、中堅部族、一般部族からなっていることが大筋として判明した。

次に、表Ⅱから、モンゴル帝國各王家の「御家人」達、特に閣僚・重鎮となった者達とチンギス一門との絆について考察してみよう。

第2章 モンゴル帝國各ウルスの閣僚と軍隊

モンゴル帝國の各ウルスには、チンギス・カン分與の千人隊を中核とする基幹の軍隊に、当該ウルスの閣僚・重鎮、姻族となる有力「御家人」達が配された。チンギス・カンから諸子弟に分與された千人隊は、ジョチ家、オゴデイ家、チャガタイ家、クルカン家が各4、トルイ家101、オッチギン家5、カチウン家3、ジョチ・カサル家1、母ホエルン・エケ3の計129であった。名の判明している千人隊長の数でみても、トルイ家の約50名に對し、他王家は4名前後であり、トルイ家がチンギス・カンの軍隊の壓倒的に多くの部分を繼承していた。各王家の閣僚・重鎮として政權の中樞を構成する有力「御家人」、姻族の「御家人」の数もトルイ家が他王家に對して壓倒的に多かったことは表Ⅱから直ちに理解できる。まず、トルイ家の閣僚群について整理し、次いで爾餘の王家の閣僚群について扱っていこう。

1. トルイ家

(1) トルイ家宗家（モンケ、アリク・ブケ家）

トルイ家には28部族の千人隊長達が支配する101の千人隊が分與され、オイラト、オンギラト、スルドス、バヤウト、ケレイト、タタル等のチンギス家姻族その他の諸部族との間に多岐にわたる姻戚関係が存在した。閣僚・重鎮となった数多くの有力「御家人」達の名も知られている。

トルイ家の軍隊、閣僚群はモンケ・カアンのもとに繼承され、さらに末弟アリク・ブケ・カアンに繼承された。アリク・ブケはクビライに大カアン位を奪われたが、アリク・ブケ政權の中核となった軍隊や閣僚群は基本的には息子メリク・テムルに繼承された。トルイ家宗家を繼いだ諸王メリク・テムルの閣僚群を構成した「御家人」達については、「クビライ紀」第三章中に、14世紀初頭

の状況を伝える記事があり、御家人筆頭から第19位までが列挙されている⁴²⁾。また、この記事と並んで、アリク・ブケ家の姻戚関係についても言及されている。表Ⅱから明らかなように、14世紀初頭のトルイ家宗家の閣僚群の中核となったのは、御家人筆頭、第5位、第6位、第17位を占め、メリク・テムルと3例の姻戚関係を持つスルドス部族、御家人次席、第3位、第8位、第9位を占めるコンゴタン部族、御家人序列第4位、第15位を占め、アリク・ブケ家と2例の姻戚関係を持つジャライル部族、アリク・ブケ家と6例の姻戚関係を持ち、メリク・テムルとも3例の姻戚関係を有するオイラト部族であることは明瞭である。アリク・ブケ家と姻戚関係を持ったオイラト部族はいずれもトルイ家千人隊長 *Qūtūqa Biki* の後裔である。

さて、諸王メリク・テムルの御家人筆頭はスルドス部族の *Chāūtū* である。*Chāūtū* は若年のチンギス・カンの命を助けて直ちに彼のもとに來降し、最大限の名譽と尊敬を與えられたという前記 *Sūrghān Shīra* の後裔であり、*Sūrghān Shīra* の孫、トルイ家千人隊長 *Sūdūn Nūyān* の子 *Sūnjāq Nūyān* の息子である。第4位はジャライル部族シャングト氏族⁴³⁾の *Changī Gürkān* であり、チンギス家譜代の家人の家系の出であるトルイ家千人隊長 *Ūqai Qalja・Qarājū* の後裔で、先祖傳來の職掌である御陵守護の千人隊を支配していた。諸王メリク・テムルの閣僚群の中心にあったこれらスルドス、コンゴタン、ジャライル諸部族の「御家人」達は先祖傳來の地位・職掌を繼承してメリク・テムルの閣僚群を構成していた。言いかえれば、彼等の祖先がトルイ家の閣僚群を構成していたのである。

諸王メリク・テムルの閣僚群の中核を構成したこれら三系統とは別に、モンケ・カアン時代の御家人筆頭としてジャライル部族ジャート氏族出身の *Munkasār*⁴⁴⁾ の名が知られている。彼は譜代の家人の家系の出であり、もとは

⁴²⁾ *R*: 214a, b.

⁴³⁾ 強大なジャライル部族は、ジャート、ウヤート、トランギト、シャングト等10の大きな氏族に分れていた (*R*: 14a)。「ジョチ紀」中、*Ūqai Qalja・Qarājū* の一門の *Sabā* がジャライル部族中のシャングト氏族の出身であることが記されている (*R*: 155b)。尤も、本文中、氏族名が *unkqūt* と記されているが、ジャライル部族の10大氏族中には、これに相當するものは *shankqūt* 以外には全く見當らない。

⁴⁴⁾ *Munkasār* がジャライル氏族の出であることは「ジャライル部族史」中に明記されている (*R*: 15a)。

諸王モンケのオールド長官であった。モンケ時代ヤルグチ長官としてオゴデイ統の肅清に辣腕を振った Munkasār がモンケ在世中に没した後、彼の地位を継いだのは、やはり譜代の家人の家系の出である ジャライル部族トランギト氏族⁴⁵の Jūchī Tarmala の第三子 Qūndqāi である。Qūndqāi は、中國出征中に没したモンケ・カアンの軍隊をアリク・ブケのもとにもたらし、アリク・ブケ・カアンの御家人筆頭となったが、クビライとアリク・ブケのカアン位継承争いの中で戦死した。結局、トルイの後、モンケ、アリク・ブケと継承されたトルイ家宗家の閣僚群の中核を占めた系統として知られているのは、ジャライル部族のいずれも譜代の家人の家系の出である Munkasār, Jūchī Tarmala, Ūqāi Qalja・Qarājū 兄弟の後裔の三系統、スルドス部族の Sūrghān Shīra の後裔、コンゴタン部族の Munklik Īchīge の後裔となる。これら三部族の五系統や前記オイラト部族の他、タタル、アルラト、ベースト、コルラウト、ナイマン、メルキト、カラキタイ等の諸部族の「御家人」達がメリク・テムルの麾下にいたことが確認される。前記の五系統がトルイ家宗家の閣僚群の中核であったことは、同じトルイ家のフレグ家やクビライの家の閣僚群と比較することによって確認することができる。

(2) フレグ家

フレグ・ウルスは、モンケ・カアン時代の全部族軍から分枝した極めて多系統の部族軍と西方鎮守府起源の萬人隊からなる諸勢力が戦時体制のまま征服地に居ついた言わばモンケ・カアン時代のモンゴル帝国のミニチュア版として出發した。表Ⅱからフレグ・カンからバイド・カン時代には、各部族の萬人隊長達が多数存在したことが確認されるが、これらは、遠征軍起源、西方鎮守府起源の多くの萬人隊が戦時体制のまま居ついたことを如實に示している。こうした諸部族軍並立のまま成立したフレグ・ウルスの中核となるのは最も多くの軍隊が遠征に加わったトルイ家の軍隊であり、フレグ・ウルスの閣僚群はフレグに随行してきたトルイ家の閣僚群、特にフレグ家に直屬する「御家人」達であ

45) Jūchī Tarmala がトランギト氏族の出であることは、「チンギス紀」中、Jūchī Tarmala の兄弟 Jūchī Jāūrqāi が「tūrānqīt 氏族長」と記されていることから確認できる (R: 72a)。

った。

フレグに御家人筆頭、統合オールド長官として随行してきたのはジャライル部族の譜代の家人の家系の Jūchī Tarmala の第四子 Īlkāi Nūyān である。Īlkāi Nūyān はトルイ家宗家のモンケ・カアン、アリク・ブケ・カアンの御家人筆頭を務めた Qūndqāi の弟である。Īlkāi Nūyān の後裔は歴代イル・カン政權下、Shīktūr Nūyān, Āqbūqā, Ḥusain Gūrkan, Ḥasan Buzurg 等、最も多くの御家人筆頭、次席を輩出して強力であり、フレグ家の正統が絶えた後、ジャライル朝を開いて最終的に西北イランの地を支配したのも Īlkāi Nūyān の後裔であった⁴⁶⁾。Īlkāi Nūyān については、「ジャライル部族史」、「チンギス紀」中に、特に高位の著名な「御家人」として格別に強調して記されている。

フレグに御家人次席として随行してきたのはスルドス部族の Sūrghān Shīra の曾孫 Sūnjāq Nūyān で、アリク・ブケ家の諸王メリク・テムルの御家人筆頭 Chāūtū の父である。フレグ・ウルスにおいては Sūnjāq とその兄弟 Tūdān の一門から御家人筆頭、次席が輩出し、Jūchī Tarmala の後裔ジャライル部族と共にフレグ・ウルスの全時代を通じて終始強力であった。フレグ家の正統が絶えた後、Jūchī Tarmala の後裔と最後まで西北イランの覇権を争ったのも、このスルドス部族の Sūrghān Shīra の後裔達であった。

以上の二系統以外のトルイ家閥僚群中核構成部族のフレグ・ウルスにおける状況を見ると、モンケ・カアンの御家人筆頭、ジャライル部族の Munkasār の系統では Munkasār の息子 Hindūqūr がモンケの指名を受けて萬人隊長としてフレグに随行し、その後裔達も萬人隊長職を継承して歴代イル・カンに仕えた。御陵守護千人隊を支配した Ūqāi Qalja・Qarājū 兄弟の後裔ジャライル部族の Sartāq Nūyān は諸王アルグンのオールド長を務めた。その祖 Sabā は若き日のチンギスの有力側近 (mu'tamid) としてジョチの出生に立ち會った人物であり、Sartāq は、この著名な Sabā の後裔の特別な家系の人物として「ジャライル部族史」、「チンギス紀」、「ジョチ紀」の三ヶ所に特に強調して伝え

⁴⁶⁾ Ḥasan Buzurg の子 Shaikh Uwais が最終的にアゼルバイジャンの地を確保した。

られている。この系統は、前記 *Īlkāi Nūyān* の後裔達と共に、ジャライル部族中、チングス一門と姻戚関係を結んだ数少い例としても知られており、格別の家系として特別の待遇を受けている。諸王メリク・テムルの御家人次席に列されたコンゴタン部族の *Munklik Īchige* の系統もフレグ・ウルスで萬人隊長職、ヤルグチ職、その他の職掌をもって活動したことが知られている。トルイ家宗家の閣僚群を構成する諸系統は *Jūchī Tarmala* の後裔ジャライル部族と *Sūrghān Shira* の後裔スルドス部族を雙壁として、いずれもフレグ・ウルスで重きをなしていたのである。

さて、極めて多岐にわたる部族の様々の系統の部族軍が並存して成立したフレグ・ウルスの分立的體質は1282年、第二代イル・カン、アバカ・カンの没後カン位継承争いと絡んで表面化した。この争いの中心にあったのは西方鎮守府の萬人隊起源の軍隊を支配したスニート、ベスート、スカヌート、アルラト、オルクヌート部族の部將達で、結局、彼等はガザン・カンに徹底的に討たれてその軍隊を解體された。彼等と同調してガザンと對立したオンギラト部族、コンゴタン部族が討たれ、オイラト部族の三系統中、二系統が討たれた⁽⁴⁷⁾。代ってガザンに従って行動したマンガト、バルクト、バヤウト、ウリャンカン、ノクズ、クイン・タタル、トトカリウト・タタル、スルドスの諸部族が擡頭し、戦時體制のまま成立したフレグ・ウルスの部族構成は大きく變った。ガザン・カンが在位八年半で没した後、以前から後繼者に指名されていた異母弟ハルバ نداが特別大きな混亂もなくオルジェイト・カンとして即位すると、オルジェイトと繋りが強いジャライル、スルドス、ウイグル、チャガン・タタル、ケレイト等の諸部族が御家人序列の上位を占め、ガザン・カン政權の有力「御家人」達の多くは序列10位臺の邊境地帯の「御家人」へと降格した⁽⁴⁸⁾。ガザン・カン時代に續いて御家人筆頭の地位を維持した *Jadai Nūyān* の後裔 *Qut-lughshāh* のマンガト部族も1307年、ギーラーン征討戦における彼の戦死後、急速に力が弱まった。アブー・サイード・カン時代、内部抗争の中でオルジェ

(47) ホラサン總督 *Arghūn Āqā* の後裔が討たれ、*Qūtūqa Bīkī* の後裔は部族ごとマムルーク朝に逃亡した。

(48) 『*Tārīkh-i Ūljāitū*』: アヤソフヤ圖書館所藏寫本3019: 140a, b, 『序説』: pp. 135-136.

イト政権の有力部族ケレイト部族や、トトカリウト・タタル部族をはじめとするガザン・カン時代の有力「御家人」達が討たれた。

結局、フレグ・ウルス成立時からアブー・サイード・カン時代の終りまで終始強盛を保持し続けたのは、ガザン・カン時代以後もフレグ一門との姻戚関係を強化していったジャライル部族 Jūchī Tarmala の後裔とスルドス部族の Sūrghān Shīra の後裔の二系統だけである。この他、アブー・サイード・カン時代の末に至るまで政権中樞部での活動が知られているのは、諸王アルゲン、ガザン、オルジェイト、アブー・サイードの師父を輩出した前記 Sūrquān の後裔バヤウト部族・ウイグル部族の「御家人」達、オルジェイト・カンの有力側近を輩出したチャガン・タタル部族の「御家人」達ぐらいしか見當らない。建國時代以来、諸系統が複雑に並存していたフレグ・ウルスの諸部族は、アバカ・カン没後のカン位継承争い、ガザン・カンによる対立勢力の徹底的討滅、アブー・サイード・カン時代の内部抗争を経て、フレグに御家人筆頭、次席として随行してきたトルイ家宗家の閥僚群の中核を占める Jūchī Tarmala の後裔ジャライル部族と Sūrghān Shīra の後裔スルドス部族のもとに統合されていったのである。

さて、ここで興味深いのは、14世紀初頭のほぼ同時期、同じトルイ一門のオルジェイト・カンの閥僚群の出身部族と、諸王メリク・テムルの閥僚群の出身部族がほとんど重なり合わない点である。ジャライル、スルドス、タタル、ナイマンの諸部族が一致しているが、ジャライル部族の場合、オルジェイトの閥僚は Jūchī Tarmala の後裔、メリク・テムルのそれは Ūqāī Qalja・Qarājū の後裔で別系統である。タタル部族の場合、メリク・テムルの閥僚は Shīgī Qūtūqū の後裔、オルジェイトのそれは全く別系統である。ナイマン部族の場合はオルジェイトの閥僚がフレグの前鋒軍となった Kitbūqā の後裔で、メリク・テムルのそれはいかなる系統か確定できない。アバカ・カンの御家人序列筆頭から第6位までも含めて、上述の諸部族以外に、フレグ家で御家人序列に名を連ねるマングト、ドルバン、ウイグル、ケレイト、ノクズ、バヤウト、ウリャンカン、スニート、オイラト等の諸部族と、メリク・テムルの御家人序列中に見られるコンゴタン、ベスート、アルラト、コルラウト、メルキトの諸

部族とは全く重ならない。結局、出身部族・系統が一致するのはスルドス部族 *Sürghān Shira* の後裔だけである。このようにそれぞれの閥僚群の出身部族が重なり合わないのは、フレグの遠征に際し、当該部族きっての有力「御家人」が遠征軍に加わったか、モンゴリアに残留したかに起因すると考えられる。当然のことながら、フレグ家からはフレグ直属の御家人筆頭、次席以下の強力「御家人」達がフレグに随行した。しかし、同じトルイ家であっても他の王家の場合、当該王家の御家人筆頭をはじめとする最有力部將達はモンゴリアの本来の住地で当該部族の運営、軍隊の支配にあたらねばならず、彼等の子弟や一門の「御家人」達が遠征に加わった場合が多かったと思われる。つまり、大立物の「御家人」達が遠征に加わった部族はフレグ・ウルスの熾烈な争いを生き残ってオルジェイト・カン時代に至り、二番手、三番手以下の「御家人」が遠征に加わった部族はそこまで生き残ることができなかったのである。一方、二番手、三番手以下の「御家人」が遠征に加わり、最有力「御家人」がモンゴリアに留った部族はトルイ家宗家の閥僚群として諸王メリク・テムルの時代に至ったのである。このことを裏づけるものとして、クビライ家所屬のバーリン部族の *Bāyān* の例がある。*Bāyān* はクビライ家からフレグの遠征に参加したが、クビライの召還をうけて東方に戻り、クビライ政權屈指の有力「御家人」、萬人隊長として活躍し、御家人筆頭にもなった⁽⁴⁹⁾。*Bāyān* が東歸して以後、フレグ・ウルスにはバーリン部族の有力部將の活動は全く見うけられない。有力「御家人」が存在する部族は当該王家で有力なのである。

(3) クビライ家

クビライ家の御家人筆頭として知られているのは、バーリン部族の *Bāyān* であり、トルイ家宗家や、これから分枝したフレグ家の閥僚群の出身部族とは異なる。クビライは、モンケ・カアンからトルイ家の軍隊を継承していたアリク・ブケ・カアンを倒してカアン位を奪ったが、トルイ家宗家の軍隊・閥僚をそのまま継承したわけではなかった。クビライが最も信頼できたのはトルイ家の中であって本来クビライ家に所屬していたバーリン部族の「御家人」達であ

(49) R: 41a. 『序説』: pp. 359-360, 370.

った。クビライ政権下にはウリヤンカン、フーシン、アルラト、ジャライル等の萬人隊長達がいたが、彼等は、アリク・ブケ・カアンとの争いに際してクビライ側についた者達であり、本来はクビライ家に所屬していたわけではなかった。多くの直屬軍團を所持していなかったクビライ家は「家の子」、「郎黨」であるバーリン部族の「御家人」を御家人筆頭に据えざるを得なかったのである。クビライ家の御家人筆頭となったコルラウト部族の Tūrtaqā の例もあるが、彼はもともとアリク・ブケ家所屬の人物であった。大元ウルスの部族構成は基本的にはトルイ家宗家やフレグ家と大きく異なるものではないが、クビライがトルイ家宗家の軍隊・閥僚を継承しなかったため、閥僚群の構成はトルイ家宗家やフレグ家とは異なることになった。要するに、アバカ・カン、オルジェイト・カン、諸王メリク・テムルの御家人序列に列されている「御家人」達の出身部族、クビライ家の「御家人」達の輩出部族を合せれば本来トルイ家を支えてきた主要部族の全體像が見えてくるのである。

2. チャガタイ家

チャガタイ家にはチングス・カンからジャライル部族、バルラス部族など四つの千人隊が與えられ、オングラト、オイラト、スルドスの各部族との姻戚關係が知られている。「ジャライル部族史」中に⁶⁰⁾

チングス・カンの世においても、現在〔ガザン・カン時代〕においても、これら〔ジャライル〕諸部族出身の多數の御家人達がトランとイランにいたし、今もいる。

とあって、ジャライル部族出身の「御家人」達がチングス・カン時代以來、ガザン・カン時代に至るまで、トランとイラン、即ち、チャガタイ・ウルス、フレグ・ウルスに多數いたことを傳えている。既に述べたとおり、フレグ・ウルスにおいてジャライル部族の譜代の家人の家系の三系統の「御家人」達の活動が活發であり、これら三系統以外にもジャライル部族の多くの系統がフレグ・ウルスで活動していたことが確認できる。一方、チャガタイ・ウルスのバラク・カン（在位 1266—1271）時代の御家人筆頭はチャガタイ家の千人隊長ジャ

⁶⁰⁾ R: 14a.

ライル部族の Mūge の子 Yīsūr Nūyān, 次席は譜代の家人の家系の前記ジャライル部族の Jūchī Tarmala の後裔であり, チャガタイ・ウルスの閣僚群の中核はやはりジャライル部族の「御家人」達であった。

Jūchī Tarmala の長子 Qūtuqū (Qūtūq, Qūtūqtū) はチャガタイの宿老 (pīr = オルド長) を務め⁶¹⁾, 息子の一人 Alaqan はバラク・カンのフレグ・ウルス領ホラサン進攻作戦に従軍し, アバカ・カンのもとに投降してフレグ・ウルスの千人隊長となった⁶²⁾。Jūchī Tarmala の第二子 Qūtūqdar の子 Balāūdār はバラク・カンの軍隊のフレグ・ウルス領侵入の直前, 使者としてフレグ・ウルスに來り, スパイ容疑で捕えられ, タブリズの獄舎で死んだ⁶³⁾。フレグ・ウルスの大立者 Īlkāi Nūyān (Jūchī Tarmala の第四子) の第七子 Jalāirtāi はバラク・カンの御家人次席で, ホラサン進攻作戦に反対の御家人筆頭 Yīsūr Nūyān に代って進攻軍の事実上の總司令官を務めたが, アバカ・カンの軍隊に敗れた。この時以後, チャガタイ・ウルスにおける Jūchī Tarmala 一門の活動は知られていない。

Mūge とその後裔達については「チンギス紀」千人隊一覧, チャガタイ家の條に⁶⁴⁾,

Mūge Nūyān の千人隊: [彼はジャライル] 部族の出身であった。Yīsūr Nūyān の父 [である]。Yīsūr Nūyān といえば, ドア [・カン] が彼に軍隊を与え, ホラサン邊境に派遣し, [フレグ・ウルスの] 諸軍隊と對峙してバルフ, バドギス地方に駐屯させた。彼の息子の一人は掠奪されて [フレグ・ウルスの] Naurūz の兄弟 Amīr Hājī のもとにいた。そして, この [イランの] 地で没した。かの [チャガタイ・ウルスの] 地には Yīsūr Nūyān の別の息子達がいた。

とある。Mūge の子 Yīsūr Nūyān については「アバカ紀」中に記事があり, バラク・カンの御家人筆頭だった彼が, バラクのフレグ・ウルス領ホラサン進攻作戦に反対したことが記されている⁶⁵⁾。また, 「千人隊一覧」の記事に

61) R: 174b.

62) R: 248a, 14b. 『序説』: pp. 352-353.

63) R: 14b.

64) R: 131a.

より、Yīsūr Nūyān がドア・カン（在位 1282—1307）の時代も、フレグ・ウルスとの國境地帯を固める有力「御家人」としてドア・カン自身の指名で活動していたことが判明し、彼がバラク・カン時代同様、ドア・カンの時代も御家人筆頭であったことを窺わせる。

引用した「千人隊一覽」の記事から Yīsūr Nūyān の息子達がチャガタイ・ウルスで活動していたことが確認されるが、「千人隊一覽」には、さらに續けて⁶⁹、

チングス・カンはこの二人の上述の御家人（ジャライル部族の Mūge とバルラス部族の Qarāchār Nūyān）と、その名は知られていない他の二人の御家人と共に總勢四千の軍隊をチャガタイに與えた。現在〔ガザン・カン時代〕、ドアと共にいるチャガタイやその息子達の根幹の軍隊はこの四千人〔を起源とするもの〕である。子孫が生れてさらに人数は増えている。

とあって Mūge の子 Yīsūr Nūyān の後裔達はガザン・カン時代に至るまでチャガタイ家の中核の軍隊を支配していたことが知れる。

チャガタイ・ウルスの御家人筆頭、次席、宿老として閣僚群の中核にあったのは当初、ジャライル部族の Jūchī Tarmala の後裔と、同じくジャライル部族のチャガタイ家千人隊長 Mūge の後裔達であったが、バラク・カンの時代、ホラサン進攻作戦の失敗から Jūchī Tarmala の系統が後退し、以後はドア・カンの時代まで Mūge の子 Yīsūr Nūyān とその息子達が閣僚群の中核を占めていたと考えられる。但し、14世紀初頭、『モンゴル史』執筆當時のチャガタイ・ウルスの御家人筆頭はスルドス部族の Kūbak であることが「クビライ紀」中に明記されている⁶⁹。14世紀のはじめ、スルドス部族の「御家人」が御家人筆頭となったのはフレグ・ウルス、トルイ家宗家の場合と軌を一にしている。

3. オゴデイ家

オゴデイ家には、ジャライル部族の Īlūkāi Nūyān の千人隊のほか、スル

⁶⁹ R: 246b.

⁶⁹ R: 131a.

⁶⁹ R: 214a.

ドス部族の分族タムガリーク部族, コンゴタン部族など四つの千人隊がチンギス・カンから分與された。その他, オゴデイ・カアンがトルイ家の軍隊から割いて *Īlūkāi Nūyān* の兄弟 *Dūladāi Bāurchi* に支配させ, 息子, 諸王コデンに與えた千人隊もあった。オンギラト, オイラト, バクリン諸部族との姻戚關係が伝えられている。

オゴデイ家の閣僚として著名なのはオゴデイ家の千人隊長ジャライル部族の *Īlūkāi Nūyān* の一門である。*Īlūkāi* はオゴデイの師父であった。その弟 *Īlchidāi* はオゴデイの乳兄弟であり, タタル部族の *Shigi Qūtūqū* と共にオゴデイのオルドに入り, 有職故實を習得し, 高位御家人となった⁶⁸。やがて, オゴデイ家の御家人筆頭, 侍衛萬人隊長となったが, トルイ統との政權抗爭に敗れて處刑された。「ジャライル部族史」中には, *Īlūkāi* の息子 *Dānishmand* が諸王カイドのもとからアバカ・カン (在位 1265—1285) のもとに使者として派遣されたことが伝えられており⁶⁹, オゴデイ統がトルイ統に敗れてからかなり経過した時代に, オゴデイ家の重鎮の息子がオゴデイの孫, 諸王カイドのもとに側近の重要人物として仕えていたことが確認される。コデン家はトルイ家との友好關係を保持して長く存続したが⁶⁹, その間コデン家の閣僚群の中心にあったのが *Dūladāi Bāurchi* の後裔達であることは間違いないところであろう。オゴデイ家の閣僚群の中核もジャライル部族であった。オゴデイの師父, 乳兄弟からオゴデイ家の最有力閣僚となった *Īlūkāi*, *Īlchidāi* 兄弟の系統は, 師父, 乳兄弟という經歷からみて, 古くからチンギス一門の身近にいた譜代の家人の家系の出身者と思われる。チャガタイ家の御家人筆頭を輩出した *Mūge* の系統も同様であろう。

4. ジョチ家

ジョチ家にはフーシン, スィジウト, キンキト部族の四つの千人隊がチンギス・カンから分與された。これらの軍隊が14世紀初頭に至るまで, バト家, オ

⁶⁸ R: 14b.

⁶⁹ R: 14b.

⁶⁹ 杉山正明「東西文獻によるコデン王家の系譜」(『史窓』48, pp. 181-202., 1991年) 参照。

ルダ家の主力の軍隊であったことが「チンギス紀」千人隊一覧、ジョチ家の條に明記されている⁶¹⁾。その他、オイラト部族の Qūtūqa Biki の後裔が支配するジャライルの二千人隊やアダルキン部族の存在も知られている。また、トルイ家の千人隊長 Kūki Nūyān・Munktū Qiyan の後裔達が支配するキヤート部族の萬人隊の存在も知られている⁶²⁾。トルイ家の千人隊長の後裔達が支配するジョチ家の萬人隊というのは通常では考えられない話であるが、バトの遠征に参加したキヤート部族軍が大量に残留した結果であろうか。その他、ジャジラート部族、ベスート部族の「御家人」達の活動も知られている。姻戚関係はオンギラト部族の16例をはじめ、タタル部族、オイラト部族、スルドス部族、ナイマン部族、ジャジラート部族、キプチャク部族など、チンギス家姻族を中心とする多くの部族との関係が知られている。オンギラト部族との16例は他の王家と比べても突出している。結局、ジョチ・ウルスはジョチ家に分與された軍隊を基幹に、オンギラト部族その他のチンギス家姻族、バト遠征軍残留者からなり、師父・宿老 (pīr) を輩出している最大の姻族、オンギラト部族が閣僚群の中核にあったと考えられる。

5. 東方王家

東方王家にもチンギス・カンから諸部族の千人隊が分與されたが、これら千人隊を支配した「御家人」達、その他当該王家の閣僚群を構成した「御家人」達の具体的な名は伝えられていない⁶³⁾。

以上の如く、1400年代から1410年代に至るまで、モンゴル帝國各ウルスの中核を占めたのは、基本的には、ジャライル、コンゴタン、バヤウト部族の譜代の家人の家系の「御家人」達、チンギス若き日の命の恩人である早期來降者筆頭の後裔スルドス部族の「御家人」達と、オンギラト、オイラト、タタル、ケレイト等のチンギス一門の姻族であった。オンギラト以下の四部族はチンギス政權勃興期の強大部族であり、オンギラト、オイラト兩部族は戦わずしてチンギスのもとに來降し、タタル、ケレイト兩部族はチンギスに討たれてチンギス

⁶¹⁾ R: 131a.

⁶²⁾ R: 129b, 31a.

⁶³⁾ R: 131b, 132a.

政權下に組み込まれた。つまり、チンギス家譜代の「御家人」を核とし、強大部族を姻族としてとり込んだ準王族部族がモンゴル帝國各ウルスの閥僚群の中核であった。こうした準王族部族中、モンゴル帝國の多くのウルスにわたって活動が顕著なのはジャライル部族であり、特に譜代の家人の家系の強盛は群を抜いている。往古、七萬家族からなるといわれたジャライル諸部族中、チンギス七世の祖の妻子殺害に関わってチンギスの祖先の家人とされた70家族の者達⁶⁴は、代々、下男、爺や、守り役として主家に仕えてチンギス時代に至った。彼等はチンギス政權の勃興期、形成期に、「家の子」、「郎黨」として、さらには、「侍大將」、「家老」、「顧問」として働き、「譜代家人」(ötegü boqol)の地位と特權とを與えられた。モンゴル帝國時代には、トルイ家宗家、フレグ家、チャガタイ家、オゴデイ家において、御家人筆頭、次席に列されて閥僚群の中核を占め、いわば「統合軍司令官」、「宮廷長官」、「親衛隊長官」、「樞密顧問官」ともいうべき内務・軍事の要職に就き、当該ウルスの運営にあたった。また、彼等は当該ウルスの「御家人」達、部將達を統轄する「大目付」、「目付」でもあった。

チンギス一門と諸部族との姻戚関係はトルイ家の158例が最も多く、ジョチ家30例、以下、チャガタイ家、オゴデイ家と続く。こうした中、トルイ家をはじめとする主要四王家總てに姻戚関係が知られているのはオンギラト、オイラト二部族のみである。トルイ家以外の複数の王家との姻戚関係が知られているのもタタル、スルドス、ケレイトの三部族にしかすぎない。バヤウト、ジャライル兩部族はトルイ家との姻戚関係のみが知られるトルイ家姻族であった。

要するに、モンゴル帝國各王家には基幹となる当該王家所屬の千人隊に、譜代の家人の家系の出であるジャライル、コンゴタン、バヤウト諸部族の「御家人」、早期來降者筆頭、チンギスの命の恩人の家系スルドス部族の「御家人」、チンギス一門の姻族であるオンギラト、オイラト、タタル、ケレイト諸部族の「御家人」達が閥僚・重鎮として配され、譜代の家臣であるジャライル、コンゴタン、スルドス等の部族の「御家人」達が当該王家の諸部將、兵員達を統轄したのである⁶⁵。チンギス一門の各王家は、チンギス一門を王族に戴く、國家

⁶⁴ 『序説』: pp. 319-323.

構造、支配者層の構成、季節移動する生活様式、言語、風俗、習慣、法律（チンギス・カン法典＝ヤサ）等を同じくする同質國家であり、個々の獨立性を維持しながら大きく連帯していた。こうした諸王家中、フレグ・ウルスは13世紀中葉モンケ・カアン時代の全王家の各部族軍から一定の割当てで分枝したまさに部族連合國家モンゴル帝國のミニチュア版として成立した。ガザン・カンはチンギス・カンの遙か遠い祖先の時代から説きおこし、モンゴル帝國全王家の全部族について詳述したが、それはそのまま、逼迫した状況下にあったフレグ・ウルスのモンゴル諸部族の全將兵に對する呼びかけ、訴えであった。

ガザンは、國庫がほとんど枯渇し、部族連合の絆が極端に弛んだフレグ・ウルス崩壊の危機の中、ほとんど直屬軍を持たないまま即位した。ガザンの身近にいたのはバヤウト部族出身の自らの師父一門、父アルグンの乳兄弟一門、ガザンを養育した大ブルガン・ハトン（父アルグンの妃）のオールド長、ガザンの「家の子」、「郎黨」であるマンガト部族の「御家人」達等、幼少時代以來のごく一部の側近達にしかすぎなかった。イランで生き残っていこうとするガザンにとって、フレグ・ウルスにおける様々のモンゴル部族の「御家人」達を自らのもとに繋ぎとめると共に、新たな直屬軍を編成することが不可欠の急務であった。こうした中、ガザンは多くの對立勢力を辛うじて倒すと直ちに、戰利品獲得とモンゴルの團結心高揚を目的とするマムルーク朝への遠征事業と連動させ、フレグ・ウルスの成員達にチンギス一門とモンゴル諸部族の長年にわたる絆を詳細に伝え、モンゴルとしての自覺を強く呼び起させる國史『モンゴル史』編纂事業を敢行したのである。

ガザン・カンはモンゴル帝國遊牧部族連合の中核がチンギス一門の廣義の家族員を輩出する準王族部族であることを熟知していた。御家人筆頭、次席としてフレグ・ウルスの諸部將を統轄してきたのがジャライル部族の Jūchī Tarmala の一門とスルドス部族の Sūrghān Shīra 一門であることもよくわき

69 チンギス政權草創期から14世紀初頭に至るまで、チンギス一門との關係が特別に深い特定部族の特定系統の「御家人」達がモンゴル帝國の各ウルスにおいて關係・重鎮として政權の中樞を占め、當該ウルスを支えたが、チンギス一門と麾下の諸部族との結びつきは、本稿で扱った時代以後、各王家ごとに獨自に變化していき諸部族は再編成され、ポスト・モンゴル期に至った。この間の状況については從來ほとんど研究されておらず、今後の重要研究課題となっている。

まえていた。『モンゴル史』（『集史』『モンゴル史』）中、兩系統のフレグ・ウルスにおける系譜は特に念入りに述べられており、姻族との姻戚関係も詳細に伝えられている。『モンゴル史』中に記されているチンギス一門と麾下のモンゴル諸部族との絆に関する諸々の記事は関係群構成部族をはじめとするフレグ・ウルスの諸々の部族の成員達に、モンゴルとしてのアイデンティティをよみがえらせ、自らのもとに結集させて國家崩壊の危機を克服しようとするガザン・カンの必死の叫び、訴えなのである。このことを確と理解し、amīr-i buzurg, nūkar その他の術語の意味を正しく把握した上で『モンゴル史』（『集史』『モンゴル史』）を核とするペルシア語貴重史料を精讀すれば、ドーソンの『蒙古史』をはじめとする従来どの研究からもほとんど理解することができなかった遊牧部族連合國家モンゴル帝國の基本的な骨組み、國家構造が明らかになってくるのである⁶⁹。

結 び

古來、中央ユーラシア政局を主導してきたのは北アジア（通念でいえば中央アジアに属すとされているところもかなり含む）に興ったモンゴル系、テュルク系遊牧・狩獵騎射戰士達であり、彼等の不斷の南下と西進が中央ユーラシア史を動かし、展開させた。匈奴以來の北方遊牧勢の漢土への一連の南下は北魏を経てついには隋唐鮮卑帝國を成立させ、鮮卑（隋唐）、突厥・回鶻時代には遊牧民出身者達の支配が北アジア、中央アジア、漢土を覆いつくすこととなった。この流れは、さらに、五代突厥王朝、遼・金時代へと連なっていく。五代十國を統一した宋の王室をはじめ、當時の華北の住民の多くも往昔、華北に南下してき

69) 崩壊の危機に類した己のウルスの起死回生を目ざして編纂させたガザン・カンの『モンゴル史』は本來は獨立した作品であり、現在見られる『集史』の一部として書かれたものではなかったが、モンゴル帝國全體にわたる政情好轉の中、オルジェイト・カンの命で改變され、モンゴル帝國の世界支配を謳歌する『集史』の一部として採録された。原典『モンゴル史』編纂時の状況をよく理解した上で『集史』『モンゴル史』を讀まないで、ガザン・カンの訴え、叫びを見誤ってしまうこととなる。

また、「ガザン・カンは新國家建設の記念碑として『モンゴル史』を編纂した」と言われてきたが、これは誤りである。『モンゴル史』は、己のウルスの起死回生をはかるガザン・カン乾坤一擲の作であり、斷じて左うちわの文化事業の産物などではない。勿論、ガザン・カンは『集史』の編纂と直接の関係はない。

た遊牧民の後裔達であった。一方、回鶻諸部の西方移動、遊牧セルジューク族の西方移住により、西アジア、南ロシア、西北インドにも幾多の遊牧國家が成立した。こうした諸勢力を併せた頂點にモンゴル帝國のユーラシア大陸東西に跨る支配があり、さらに、ポスト・モンゴル期のティムール帝國、ムガル帝國、ウズベク諸王朝、オスマン帝國、ジャライル朝、カラ・コユンル朝、アク・コユンル朝、サファヴィ朝へと繼承され、現在の諸國家に直結している。中國史も、中央アジア史も、西アジア史も、ロシア史も、長らく遊牧・狩獵騎射戰士達を主人公とする中央ユーラシア史の一部として展開してきたのである。

匈奴以來、ユーラシア大陸の東西に成立したモンゴル系・テュルク系の諸國家の多くが王族と麾下の遊牧諸部族を支配者層とする基本的にはモンゴル帝國と同様の遊牧部族連合國家とその繼承國家であった。これら遊牧國家の支配者層は當該時代の情勢についての正確な知識と情報のもとに國家運営にあたる開化、開明した存在であり、遊牧支配者層と、彼等に「御雇外國人」として仕えた漢人、タジク人等定住民との関係は「主人」と「召使」、「經營者」と「使用人」の関係であった。ところが、19世紀以來の諸先學は頭から遊牧民を野蠻、未開と決めつけてかかり、「野蠻・未開の遊牧民と、彼等を指導、補佐する定住民」という事実とは全く逆の前提を自明のものとして諸史料の字面を読んだ。このため、遊牧支配者層や遊牧國家の實體が明確に把握されることは極めて稀であった。遊牧支配者層は自らの言語であるモンゴル語、テュルク語で自らの國家についての詳細な同時代史料を殆ど残さず、研究は支配下の定住民が記した漢文史料、ペルシア語史料等の非モンゴル語、非テュルク語史料を典拠として進められた。誤った前提でこれら史料の字面を読んだ諸先學は支配者層を意味する術語、その他遊牧國家の根幹にかかわる重要術語を術語と認識できずに考察の対象外に放置し續けてしまった。かくして遊牧國家の核心部分は全く判然としなかったのである。

「野蠻で未開の遊牧民と、彼等を指導・補佐する開化した定住民」という前提は、壓倒的に強力な遊牧民の軍事力に押えられ續けてきた定住民の極度の劣等感を裏がえした虚勢の言をそのまま信じ込んだだけのものであったり、かつての遊牧勢の壓倒的な優位を逆轉させたと確信していた19世紀以降の諸先學

の、その時以前の遊牧民や遊牧國家にまで遡って見下した獨善的な見解に基づく根底から誤ったものである。遊牧國家について考察するにあたっては、まず、遊牧支配者層は開化したモンゴル系、テュルク系の王族と麾下の諸部族であることを確と銘記してかからねばならない。そしてまた、ペルシア語、漢文等によって書かれた史料は、モンゴル系、テュルク系王族、諸部族を支配者層とする國家構造、生活様式、社會構成、風俗、習慣、法律、言語を具にする遊牧民とその部族連合國家について定住民が記したものであることも辨えてかからなければならない。

たとえば、ペルシア語史料中、Sultānshāh という純然たるイラスム・イラン式の名前で記されている人物も實はれっきとしたモンゴル遊牧戰士であったり、漢文史料中に劉某とある人物が匈奴人であったりする。ペルシア語、アラビア語、漢語のごくありふれた語も文字通りに理解すれば實體とは大きく異ってしまう場合がある。「宮殿」とあっても首都に礎石を組んで作った建造物ではない。その實體は移動できるテントであり、折りたためばなくなってしまうものである。「政府」も遊牧君主と閣僚・百官がテントと共に日々移動するものである。「首都」といっても官衙が林立する場所ではない。基本的には遊牧君主とその一族、閣僚、百官がしかるべき季節にテントを張ることができる廣大な草原である。

また、遊牧國家固有の術語が直譯されて、ごくありふれたペルシア語、漢語で記されている例も多いが、とかく術語とは認識できずに考察の対象外に看過しがちである。特にその術語が遊牧國家の根幹に関わる術語であった時には問題は深刻である。遊牧國家に限らず、當該國家の存立に関わる重要術語が術語と認識されずに考察の対象外に放置されたとなると當該國家の核心部分の理解は殆ど不可能となる。例えば、鎌倉幕府將軍直屬の家臣「御家人」が字面どおり「servant」あるいは「slave」と譯出されている時、これを普通名詞の「召使」、「奴隸」と見て考察の対象外に放置すれば、鎌倉幕府存立の基盤を理解することはできない。また、江戸幕府の「大老」、「老中」、「若年寄」が同様に「extra old」、「middle old」、「young old」と直譯されている時、これらを「よぼよぼ爺さん」、「爺さん」、「初老のおやじ」とみなし、「大名島津氏」

の譯語「big name Shimazu」の big を衍字とみて「島津という名の人」，「島津さん」と解して特別の關心を持たなければ，幕藩體制も幕閣の構成も全く理解することができない。もちろん，日本史研究においてこのような闇が抜けたことは起りようはない。しかし，遊牧支配者層を頭から野蠻・未開と決めつけてかかり，非モンゴル語・非テュルク語史料の字面を讀んでなされる遊牧國家史研究においてはこうした類の事例が頻出することとなる。本稿で扱ったモンゴル帝國史上の重要術語 *nökör* の例はその典型的なものである。

チンギス・カン一門を支える「大名」，「旗本」に相當する有力部將は，「チンギス・カン一門の家人」，即ち「御家人」を意味するモンゴル語術語 *nökör* の名で呼ばれており，*amīr-i buzurg*, *nūkar* とペルシア語譯されて記されている。ところが，これらは字面どおりの何の變哲もない普通名詞とみなされ特別の考察の対象とはならず，部族連合國家モンゴル帝國存立の基盤も，基本的な國家構造も判然としなかった。諸々の遊牧國家やその繼承國家においてもモンゴル帝國の「御家人」同様の閣僚群や直屬の家臣團とそれを示す術語が存在したはずである。たとえば，西アジア諸語史料中に頻出する *ghulām* という語がある。*ghulām* は通常，「普通名詞」として「奴隸」と譯されていることが多いが，モンゴル帝國の「御家人」(*nökör*)のペルシア語譯 *amīr-i buzurg*, *nūkar* の例と同じく，中央ユーラシア遊牧國家史上の重要術語の譯語としての用例も見落してはならない。當該政權の中核を構成する有力者を意味する術語がそれと認識されずに放置されている例はこれ以外にも數多く存在する。遊牧國家とその繼承國家の核心部分はいまだその多くが解明されていない。基礎，土臺がいっこうに定まらないまま非モンゴル語史料，非テュルク語史料の字面を讀んで迷走しているのが現在の研究狀況といえよう。こうした狀況を打破するためには，まず，非モンゴル語史料，非テュルク語史料の中から政權の中核を占める者，政權を支える基盤となる者を示す術語を明らかにし，次いで支配者層を抽出，分析して基本的な國家構造を明らかにしていかなければならない。

「王族一門と麾下の諸部族との部族連合」，「政權の中核を構成する姻族その他の王族の擬制家族」等が各遊牧國家とその繼承國家に共通して浮び上がってくるはずである。

従来、中國史、中央アジア史、西アジア史、ロシア史の史料として何の疑問もなく利用してきた漢文史料、ペルシア語史料、アラビア語史料の多くは、實は中央ユーラシア史の大きなうねりの中、開化したモンゴル系、テュルク系遊牧民が南下、西進してユーラシア大陸各地に建國した遊牧國家とその繼承國家に關するものである。こうした諸國家について記した漢文史料やペルシア語史料を、諸先學は漢土・イランといった限定した地域の限定した時代の史料として漢土・中華思想の常識、西アジア・イスラムの常識で讀みとってきた。これではモンゴル語、テュルク語を話す王族・閥僚を支配者層とする當該國家の因ってきたところ、中央ユーラシア史上に占める位置、基本的な國家構造等々、肝心な諸點は明らかにはならない。これら諸史料を利用するにあたっては、特定の時代の地域史の史料としてみるだけではなく、廣大な中央ユーラシアに連々として展開し續けてきた中央ユーラシア遊牧國家史上の史料として、誤った前提を排し、字面の奥深くを鋭く切り出してかかろうとする姿勢こそが肝要なのである。このような姿勢で臨んではじめて遊牧國家とその繼承國家の内實が明らかにされる⁶⁷⁾。遺憾なことに、このような觀點でなされた統轄的な研究は今まで存在しなかった。眞の研究はこれから始まる。

67) 漢字ばかりで書かれているからといって、『萬葉集』を漢土について記した漢文史料と決めこんでいくら精讀してもその本質は決して理解できない。「和歌集」であることを確と認識し、誤字、脱字の少ない良質寫本、校訂本を典據として臨みはじめて正しい理解が可能となる。遊牧國家史研究においてもほぼ同様のことが言える。

A				

	部 名	総 合 ポ イ ン ト	極 位 ／ 高 位 御 家 人	チ ン ギ ス 汗 分 与 千 人 隊	親 衛 隊 長 ／ 隊 士	姻 戚 関 係 数	擬 制 家 族 舅 婿 その他	譜 代 家 人	系 統	代 表 的 御 家 人 名
1	ジャライル	1146	3/22	11	1/11	9		●	トランギト	Jüch1 Tarmala
								●	ジャト	Munkasār
										Müqa11 Köyānk
								●	シャンクト	Üqa1 Qa1ja・QarāJü
										Bā1ā, Ük1ā1 Qürch1 Jalā1rtā1 Y1sür etc
								●		Müge
							◆◇	●		T1okā1・T1ch1dā1
2	スルドス	569	3/15	5	1/3	17	◎	◆	○	Sürghān Sh1ra
3	タタール	502	3/24	2	1/6	18		■		Sh1q1 Qütüqü
							◎	■		QÜ11・Qarā Mangtū Oha
								△		QÜ1āda1 Tāch1
										Samāghār
										アルチ
4	コンゴタン	352	/10	5	2/6	1		○●	●	Munk11k Tāch1ge
5	バヤウト	344	3/12	1	/4	15	◎	◆	●	Sürqān
										Unkür etc
6	オンギラト	301	2/8	2	2/	50	※			De1・Dār1tā1
										Abātā1 etc
7	オイラト	292	3/12	1	1/4	38	※			Qütüqa B1k1
										Arghūn Aqā
										T1nkk1z
8	マンガト	276	1/18	5	1/4	2		■		Jada1 Nūyan
										Qöyüldār
										Ünk Khān
9	ケレイト	219	/15		/3	17		◎		ジルキン
										トンガイト
										トマウト
										QÜ1dū
										その他
10	ウイグル	193	/8		1/4	2		◇		Kürküz
										Sh1sh1 Bakhsh1
										Tā1Jü Bakhsh1
										Ürdüqayā
										Tā1qūt etc
11	アルラト	177	1/7	2	1/5	2			▽	Bürch1

		B		

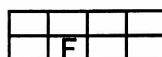
ボ イ ン ト	御 家 人 筆 頭 ・ 次 席	極 位 ／ 高 位 御 家 人	姻 戚 関 係 数	チ ン ギ ス	御 家 人 筆 頭 ・ 次 席	極 位 ／ 高 位 御 家 人	チ ン ギ ス 汗 分 与 千 人 隊	姻 戚 関 係 数	トルイ／モンケ／アリクブケ	御 家 人 序 列	姻 戚 関 係 数	メ リ ク テ ム ル	御 家 人 筆 頭 ・ 次 席	極 位 ／ 高 位 御 家 人	姻 戚 関 係 数
499					1・1										
94					1	1/			OY						
82	I	/1	T			/2	(千)							/1	
74			OG				(千)			IV	1	G(千)			
144			ts				(千)(千)			xv	1	y			
68															
105			kt												
469		1/1				/2	(千)(千)	k	I・V vi xvii	3	RKTB			/2	
65		1/	Q				(千)		x		s			1/	
161		/1	3 QQk	I	/2	(千)		OTks							
119															
65															
12															
272	I	/5	PppppOkkkk				(千)(千)(千)			II・IIIviii ix		RKKTs			
218		/1	1 O					3							2
16		/2	kk		/1	(千)									
212		/2	3		/2	(千)(千)		6 T						1/1	4
59															
103			2			(千)		5			3			/1	
124					/1										
35															
180		/1	Q			(千)								/2	
66	II	/1			/2	(千)(千)(千)									
51			1					2							
23		/5										(千)			
55															
6															
44		/1	s												
10		/1	s												
10															
88															
32															
15															
18			2												
157	I	/1	K Tk		/1	(千)(千)		T	xiv		y			1, 2	

			C	

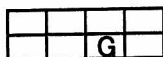
ク ビ ラ イ	★	I・V	I・I・I・II	2/6	5	OOOOI TTKkkksb	IV	II・II	/1	1	1 kks	α
	☆			/3		TTT						
tb						Os						
k(子)	☆		I	/4		OKTBkkss(使)kts(使)使			1/		s	
GTK(子)	★	II		2/7	5	OTCktsyt(使)	II	I・I・II・II	/2	7	TT(使)	β
B(使)	★			/3	5	CC	xv xx		/3		T sst	
				/5	4	KCKkk	vii xi		/3	1	OOT	γ
	☆	IV		/6	1	TCCtk			/1		TC	
				/4	1	Tkscykr(使)						
yyb	★			2/6	7	RTTB BBBb	xiii xix		/2	2	RYXT TSCBBky	γ
t				/1	9	K						
				1/2	4	KTSSs				4		
T	★			1/	10	Tss						
		VI		2/5	3	KTK	I		/3	1	Ckk	
				/1	6					4	ks	
(子)				/3	2	XXXXT kcs	I xx	I	1/2		TTksk	
				/5		kyt						
					6		vi		/1	1		
						sbc						
				/2	2	ITkks	viii				T	
				/1		J						
	☆			/2	2	Obs			/1		s	
				/1		R	V	I	/3		RR	γ
						R	xvi		/1		RSk	
						Kk	xvii xviii				kscs	
TTTTkkk				/2	2	YTks						

E				

12	スニート	168	2/8	3	/8		◇		Tamūdār
									Chürmāghūn
									その他
13	ウリヤンカン	151	1/8	5	1/3	1			Sūbtai
									Jalme
14	フーシン	149	1/4	4	/2	6		▽	Bürqūl
									Höshidai
15	バーリン	133	2/3	3	/1			▽	Nāyā etc
16	コルラウト	120	3/5		2/3	1			Abūkān
17	ベスート	116	/4	1	1/7				Jebe
									Baijū
									Küchükür etc
18	バルクート	104	1/4		/3	4	◇		Qadān Ayl'n
19	タングート	95	1/3	2	/1		■		Chaghān
20	スカヌート	87	1/10	1	/3				Qūtūs Qa1ja-Ökar Qa1ja
21	ドルバン	87	2/1	1	1/2	4			Dösqa
									Bürk1 Bärch1
22	オルクヌート	75	/7	4	/1	6			Taijū Qlnkqiyādai
23	ナイマン	71	1/2	2		6			K1tbūqā etc
24	ホイン ウリヤンカン	65		1				▲	Üdāji
25	キヤート	58	/2	1					Munktū Qiyān
26	バルラス	39	/1	3		2			Qūq1l1ai etc
27	ノクズ	37	/2	1	1/1	1			Tughrt1
28	カラキタイ	24	1/	1	1/				Üyār Wānsh1
29	オロナル	19	/5	1					Badāi • Q1sh11q
30	メルキト	18			1/				Jamāi Khwāja
31	ジャジラート	17	/1	2	/2	1			Qūshā01 • Jūsūq
32	キタイ	15	1/	1					Samka Bahādūr
33	オングート	14		1		3			At Būqā
34	イルチギン	14	/1		/1	3			Gharaq1 Nūyān
35	キブチャク	13	/1		1/1	2			
36	ジョルジャ	13	/1	1					Tughān Wānsh1
37	サルジウト	12	1/		/2				Sāmūqa
38	ウルート	11	/2	1					Kahtai
39	カルルク	11	1/		/1				
40	イキレス	10	/2	1	/1	3			Bütū
41	イルドルキン	8	/1						Harqāi J1ūn
42	キンキト	8	/1	1					Qūnān Nūyān
43	スィジウト	8	/1	1					Mönkdū
44	タムガリーク	7		1					T1ük Tūa
45	アダルキン	5		1					Mūqūr Qūrān
46	タルグート	5							
47	タイチウト	5							
48	ブダート	0							



76	/1																		
33		k																	
29		K Tkks		(千)															
99	/1	t		/1 (千)		Tt													
52	1/1	Og Kt		(千)															
111	II	/1	(K) Tts		(千)		2							/1				2	
18	/1																		
113	II	/2	TT		(千)									I		2/			
120	2/			/1				xix		k				I . I		1/			
70	/1	Tts		/2		T		xvi		k									
15																			
31		kkskks				(K)				(K)									
74						1													
15	1/	QQ		/1	(千)														
87	1/1				(千)														
27					(千)					1								1	
60		ks															1/		
75	/2	2		/1	(千)		3										/1		
71					(千)		5		xlii										
65					(千)		G												
58		T			(千)														
39	/1				(千)		2												
37					(千)														
24	1/	T			(千)			xviii		k									
19	/2																		
18		s						vii		K									
17	/1	k			(千)														
15	1/	T																	
14		1			(千)		1												
14							1												
13																			1
13	/1	T			(千)														
12																	1/		
11	/1				/1 (千)														
11																			
10		2 k		/1	(千)		1										/1		
8																			
8																			
8																			
7																			
5					(千)														
5																			
5																			
0																			



		III		1/5	RYTssk				kk	
				1/1	OTCs					
					k					
T:千	★			/4	1 OTTkky	xiv		/1	Tk	
					Tss					
T:千					2 OT				k	
TB										
	☆			/4	1 KKyk				k	
B	☆			/1	O Kksskk ₃ 使					
					T				T	
				/4	RRkkk			1/	2 ITcccc	
					tk				s	
				/8	千 ₁ 千 ₂ C.kjt			/1	kk	
				1/	2					
YBk				/1	K	III			(T)	
千:				/2	1 TTssk			/1	T	
				1/	Tt	xii		/2	T	
				/1	t		I		C	
Y:使										
				1	ss	x		/2	KCkst	
								/3	s	
									ks	
				1					2 k	
k								/1	K	
									kk	
k										
				/1	T					
					s				s	
使										
使										

			H

表Ⅱ は八分割して掲載する。構成は以下の通り。

A	B	C	D
E	F	G	H

記号・点数一覧表(各項目の<>は、点数を表す)

※ 姻戚関係 30 件以上

◎ 姻戚関係 10 件以上

■ 養子

○ 義父(チンギスの生母の再婚相手)

● 義兄弟(チンギスの生母の再婚相手の息子)

◆ 養父

◇ 乳兄弟

▲ 譜代家人

△ 準譜代家人

▼ 来降者筆頭

▽ 早期来降者

★ フレグ随行者

☆ フレグ同行者

1 α アブー・サイード・カン没後の強盛部族(最終的に西北イランを支配)

2 β 同

3 γ 同

P チンギスの義父(チンギスの生母の再婚相手) <20>

Q チンギスの義兄弟(チンギスの生母の再婚相手の息子達) <10>

P チンギスの養子 <10>

R チンギス一門の師父、乳兄弟 <10>

O オルド長官、内務長官、宿老、筆頭顧問 <20>

G 御陵(ゴルグ)長官 <10>

I 王室領(インジュ)長官 <10>

Ⓚ 親衛隊長官 <10>

K 個々の親衛隊の長 <3>

k 親衛隊士 <1>

Ⓛ 親衛万人隊長 <10>

T 万人隊長 <5>

t 方面軍司令官 <2>

Y ヤルグチ長官 <10>

y ヤルグチ <2>

S 親衛千人隊長 <5>

s 千人隊長、親衛百人隊長 <1>

C 地方総督 <3>

c 軍政長官 <1>

B ビチクチ長官、丞相 <5>

b ビチクチ <1>

J 站赤長官 <3>

j 站赤 <1>

Ⓜ チンギス・カンが諸子弟に分与した千人隊 <5>

Ⓜ 使者・使節 <5>

極位御家人 <10>

高位御家人 <3>

御家人筆頭、次席、第3位、…、第19位、第20位 <30,20,18, …, 2, 1>

姻戚関係 <3>

譜代家人 <50>

準譜代家人 <20>

来降者筆頭 <40>

早期来降者 <20>

擬制家族 <30>

System towards which the impotent Qing government could not respond because it had not established its own private law system.

GHAZAN KHAN'S DETAILED ACCOUNT OF NOMADIC TRIBAL CONFEDERATION OF THE MONGOL EMPIRE

SHIMO Hirotoshi

Faced with imminent dissolution of the Ilkhanate, Ghāzān Khān determined that he would reflect on the strong unity of the tribal confederation and embarked on the compilation of a dynastic history simultaneously with the expedition against Syria. Ghāzān himself recounted in detail the long-term ties between the hereditary retainers, *nökör*, *amīr-i buzurg*, of the various Mongol tribes and the Chinggisid house in the Persian language *History of the Mongols*, *Tārīkh-i Mughūl*. The work is an utterly unique and extremely valuable source providing first-hand knowledge of the inner workings of the nomadic tribal confederation of the Mongol empire in the voice of a Mongol emperor himself, but the various scholars who have gone through the Persian text have failed to comprehend the fundamental structure of the tribal confederation. This has been due to the fact that they proceeded to consider the entire work without comprehending the meaning of the terms *buzurg*, the Chinggisid house, and *amīr-i buzurg*, hereditary retainers.

A close analysis of the long-term ties of the hereditary retainers and the Chinggisid house across the breadth of the Mongol empire reveals the following points.

- The strength of the bonds between the Chinggisid house and individual Mongol tribes was common to each urus of the Mongol empire, and the structure of the Mongol ruling class in each urus was nearly identical.
- Those who served the qa'an and khan, the Chinggisid house, and who held high-ranking and vital posts inherited from their ancestors, and were charged with the management of the urus were retainers from

particular lineage groups within special tribes with especially strong bonds to the Chinggisid house, such as fictive kin, fathers-in-law, sons-in-law, tutors (atābek), adopted children, the children of wet-nurses (kūkaltāsh), and subjects who came from families of hereditary vassals who had served Chinggis Khan's ancestors for generations.

If Persian language historical sources and those written in Chinese are read with care and insightfully, it will surely become clear that in other nomadic states as well as the Mongol empire and in its successor states, tribal confederations were formed, and the royal family and their fictive kin occupied the core of the political regime.